

仏樹房明全伝の考察

はじめに

(一八四一—二二五)
仏樹房明全といえ、いうまでもなく京都東山に建仁寺
を開創した明庵栄西(千光法師・葉上房)の高弟のひとりで
あり、とりわけ我が道元禪師を門下に育成し、その道元禪師
をして「先師」とまで言わしめた人物として名高い。道元禪
師がもっとも長く随侍した師匠こそ明全にほかならなかった
のであり、一代の古仏、道元禪師を考察する上にも明全とい
う人の存在はきわめて重要なものが存するわけである。
明全ははじめ栄西に学び、後には道元禪師を育てること
で(二六二—二二七)
天童如浄に会うまでの橋渡しの因縁を作った影の功労者とい
ってよい存在の人である。明全と会うことがなかったなら、
後の道元禪師の大成もあり得なかったはずであり、そんな点
を考え合わせれば、初期日本禅宗史上に占める明全の位置づ
け自体が存外に大きかったと見なければならぬ。もちろん

栄西門下としての明全その人の正当な評価も、当然、問題と
すべきであろう。

ところが『続日域洞上諸祖伝』巻四「明全和尚伝」にて、
編者の徳翁良高は補注して、
(二六四—二七〇)
永平元和尚、初在建仁、事師九年、親受禪門大戒。相隨入
支那、師已滅於異域。滅後永平自志師履歷於其戒牒之裏。齋
來現在永平存焉。從來師事跡不白。故異說蜂出、無所
拠

矣。今因元師之所記、而私作略伝以附焉。

と記しており、それまで明全に対する評価がはなはだ曖昧に
されていたことを伝えている。道元禪師ははじめ建仁寺に修
学以来、明全に師事すること九年に及び、親しく禅門の菩薩
戒を受けている。そして、ともに中国南宋の地に赴いている
が、明全はついに彼の地にその身を終え、再び日本の土を踏
むことはなかったのである。明全が示寂して後に道元禪師は
その戒牒の裏にその履歴の一端を記し残したが、それは後に

佐藤秀孝

永平寺にもたらされて『明全和尚戒牒奥書』として現今に伝えられ、きわめて貴重な史料となっている。

従来、明全の事跡は明確ではなく、良高の言によれば、それまで明全の足跡については異説が多く、真に拠るべきところがなかったらしい。いまは道元禪師が直に記した元史料こそ、明全伝のもっとも基本とすべきものである。以下、こうした点を考慮しつつ、明全の伝記とその禅宗史上に占める立場を窺ってみることにしたい。⁽¹⁾

伝記史料

明全に関する伝記史料は少ないながら、直弟子である道元禪師が自ら撰述した基本史料が伝えられていることにより、今日では存外はその生涯の足跡の生の姿が知られる。すなわち嘉禄三年一〇月五日に門人の道元禪師が記した『舍利相伝記』一卷と、やはり明全の比丘戒牒に道元禪師が在宋中に記したとみられる『明全和尚戒牒奥書』とが明全伝の基本になっている。⁽²⁾

『舍利相伝記』は道元禪師が明全の在宋中の動静から示寂に至る状況、さらにその遺骨舍利の処分の顛末などを帰国直後に智姉という人の依頼で記したものであり、舍利信仰を伝える点では当時の道元禪師の著述としては特異な面もあるが、先師明全への思い入れを如実に示すものとして重要な史

料といつてよい。

『戒牒奥書』は現在、道元禪師の数少ない親蹟の一つとされ、明全示寂後に道元禪師が備忘のために明全の事跡を断片的に記したものであるが、道元禪師自身の著名も年月の記載もなく、その内容も前後関係は入り乱れているところが多い。しかし、明全の伝記はもちろんのこと、在宋中の道元禪師の動静を知る上でもきわめて貴重な史料となっている。これら両書は若き道元禪師が先師明全を失った際の悲痛を生のかたちで筆に認めている点で、他に代えがたい第一史料といつてよい。

これらに加えて南宋の宝慶元年八月九日に修職郎監臨安府都稅務の虞樗が撰し、後に陳祥という人が刊刻したとされる『日本国千光法師祠堂記』の末尾にも、明全に関する簡略な伝記的記載が存している。⁽³⁾ この書はかつて采西が天童山の千仏閣の建立に日本より木材を送ってその事業を助化した勝縁と、合わせてその祠堂が天童山内に建てられて供養の法会がなされた記事が記されている。明全が南宋の官僚士大夫である虞樗に依頼してなされたものであるが、依頼主の明全が示寂したために虞樗は明全の記事をも付録して道元禪師に付与しているわけである。したがって、この書を将来したのは道元禪師ということになる。ただし、撰者の虞樗や刊者の陳祥に関しては、如何なる素性の人かは定かでない。

これら三点の伝記史料が明全伝の基本になるが、一般の僧伝・燈史としても『延宝伝燈録』巻六に「宋国天童山了然齋明全禪師」の章が、また『本朝高僧伝』巻一九に「京兆建仁寺沙門明全伝」がそれぞれ存し、宗門内でも『続日域洞上諸祖伝』巻四「附録」に「明全和尚伝」が付載されている。⁽⁴⁾このほかに『正法嫡伝獅子一吼集』巻下や『仏祖正伝大戒訣』巻上などにも明全の伝が見い出されるが、⁽⁵⁾それらは部分的記述を除いていずれも僧伝・燈史の内容を受けるものにすぎない。もちろん、道元禪師の著述やその伝記史料にも、断片的ながら明全に関する記載が存するので、これらも考慮しなければならぬ。

以下、各史料を列記して考察する場合、つぎのごとく略称することにしたい。

舍利…『舍利相伝記』

戒牒…『明全和尚戒牒奥書』

祠堂…『千光法師祠堂記』

延宝…『延宝伝燈録』

本朝…『本朝高僧伝』

諸祖…『続日域洞上諸祖伝』

出生から比叡山での修学

はじめに問題とすべきは、明全の出生地と俗姓および出生

年時についてである。いま、この点を諸伝は如何に伝えているかを見てみよう。

舍利…ここに円寂の先師は、伊州の人、俗姓は蘇氏、法名は明

全なり。

祠堂…全生伊州、蘇氏。

延宝…宋国天童山了然齋明全禪師、姓蘇氏。勢州人。

本朝…釈明全、俗姓蘇氏、勢州人也。

諸祖…建仁寺明全和尚、世称_ニ仏樹。以_ニ元暦元年_一生焉。伊州

蘇氏之子。

明全の出身地と俗姓に関しては、古伝である『舍利相伝記』『千光法師祠堂記』とこれを受ける『続日域洞上諸祖伝』はともに「伊州の蘇氏」とするが、後世の『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』では「勢州の人」と記する。伊州であれば伊賀(三重県)とも伊勢(三重県)ともとれるが、後の史料では勢州として伊勢と見ていることになる。また諸伝がともに伝える俗姓の蘇氏とは、蘇我氏の出身を意味するものであろう。ただし、伊州の蘇氏が如何なる素性の一族かは定かでない。

明全というのが法諱であり、世に仏樹房と号したとされるが、いわゆるの禪僧としての道号は使用していなかったらしい。史伝ではようやく『続日域洞上諸祖伝』に至って「世に仏樹と称す」と記されているが、『道元和尚広録』でも「仏樹和尚」「仏樹先師」などと明全を呼んでいるから、明全が

仏樹房と号したことはまちがいなからう。

ちなみに明全の生年に関しては、示寂年と世寿との逆算から(一八四)寿永三年ないし改元されて元暦元年であった計算になる。

『続日域洞上諸祖伝』は明確に元暦元年の出生と記しているが、これは『戒牒奥書』などより逆算してのものである。したがって、明全は栄西下の同門である(一六三―一四)莊嚴房行勇(号は退耕)(一六五―一四七)や(一六五―一四七)釈円房榮朝(号は退耕)よりはかなり後輩に当たり、栄西とは実に四歳の年令差が存することになる。したがって、栄西にとつて明全はすでに晩年に近い頃に入門した門人であったことにならう。

ところで明全が出家した年令などを伝えるのは、『舍利相伝記』のみであり、そこにはわずかの記載ながら、

八歳にして親をはなれ叡山にのぼりすむ。

と示されている。八歳で親の下を離れて比叡山に上ったとされるから、(一九一)建久二年に仏門に投じた計算にならう。この年の七月には栄西が再度の入宋より帰国し、臨済宗黄龍派の禅を日本に伝えている。(一九)もっとも明全が如何なる理由で出家の道を歩むに至ったか、その具体的な事情はまったく記されていない。ただ、年令的にいっても本人の意志が反映して出家を志したというよりも、両親の事情なり外的要因などを通して出家の道を歩むことになったものと推測される。

ついで諸伝は出家剃髪(一九)の状況をつぎのごとく伝えている。

舍利…十六にして僧となり、学海をわたりゆく。あまねく頭密の奥旨をあきらめ、ひろく定慧の深際をきはむ。

戒牒…本是比叡山首楞嚴院僧也。本房下楢井房也。本師明瑤阿闍梨也。

諸祖…幼歳登比叡山、投杉井坊明瑤阿闍梨(一八九)。尋就本山戒壇受菩薩戒、專研究頭密。

明全の出家得度の年時を明確に伝えるのは『舍利相伝記』のみであり、一六歳にして剃髪して僧となったと伝えるから、(一九九)正治元年のことであったわけである。このときに明全は比叡山戒壇にて受戒し、円頓菩薩戒を授与されたことになる。ただし、この問題は後に示すごとく、明全が入宋する際に南都東大寺戒壇の比丘戒牒を所持していた事跡との関わりで混乱を生ずる面がある。

また『戒牒奥書』によれば、明全は比叡山三塔の横川にある首楞嚴院の僧であつて、本房の下の楢井房に居していたらしい。首楞嚴院は慈覚大師(七九三―八六四)円仁の建立になり、本師は明瑤阿闍梨とされ、『続日域洞上諸祖伝』ではこの人を得度剃髪の師としている。ちなみに『正法眼蔵随聞記』によれば、明瑤ではなく「明融」と表記されているから、ここでも一般に知られる明融をもってその名として表記しておきたい。明全の「明」はこの明融の系字を受けたものであらう。ただし、明融が如何なる経歴の人物かは不詳である。ただ、阿闍梨位に

あることから、当時の比叡山でも名の通った人物であったものと見られる。

ちなみに『正法眼蔵隨聞記』卷六（長円寺本）によれば、明全は明融について、

我幼少ノ時、双親ノ家ヲ出デテ後、此師ノ覆育ヲ蒙テ、今成長セリ。世間養育ノ恩尤モ重シ。又出世法門ノ事、大小權実教文、因果ヲワキマヘ、是非ヲ知テ、等輩ニモコエ、名譽ヲ得タル事モ、又仏法ノ道理ヲ知テ、今入宋求法ノ志ヲオコスマデモ、彼ノ恩ニ非ズト云コト無シ。

と語つたとされる。これによれば、明全は幼少にして両親の下を辞して後、ただちに比叡山の明融の下に投じ、その覆育の恩により成長したわけである。そして、この人により出世間の法門のことや大乘や小乗、權教や実教の教文を修め、さらに因果や是非を弁え知ることを得たとされる。明全の生涯にとつて、明融が如何に大きなはたらきを成したかが窺われよう。そして、明全もまたその恩義には充分に報いんとしていたことが知られる。

『舍利相伝記』では「十六にして僧となり、学海をわたりゆく。あまねく顕密の奥旨をあきらめ、ひろく定慧の深際をきはむ」と記されており、明全が一六歳以降、諸地の学匠を渡り歩き、あまねく顕密の奥旨を諦め、広く定慧の深際を究めたことを伝えている。また『続日域洞上諸祖伝』でも、剃

髪の後、ついで本山の戒壇で菩薩戒を受け、専ら顕密を研究したとされる。これによれば、明全は比叡山で円頓菩薩戒を授与された後、諸地に赴いて天台学や密教の教理奥旨を究めたことになろう。もちろん、それは当時の比叡山の僧としては一般的な参学過程であったといつてよい。

禅宗への転向

比叡山の僧として育つはずであった明全は、いつしか禅の研鑽へとその興味を変えている。当時は中国禅への関心がしだいに高まっていく時代であり、すでに栄西に先立って比叡山（一〇三）の覚阿（一〇四）という人が承安元年に入宋して臨済宗楊岐派の瞎堂（一〇七）慧遠（一〇八）に学んで帰国して久しく、大日房能忍（一一二）もまた文治五年に門人の練中・勝辨を臨済宗大慧派の拙庵徳光（一一三）の席下に遣わして印可を受けている。一方、栄西が臨済宗黄龙派（一一九）の虚庵懐敏の法を嗣いで再入宋より帰国するのは建久二年のことであった。

したがって、明全が新興の禅宗に傾斜していく土壌はすでに十分に培われていたといえるわけであるが、明全が禅へと転向していくさまを諸伝はつぎのごとく記している。

舍利……

しかはあれども、なをこれいさをかぞふるのりをまぬがれざることをかへりみて、ついにすなはち建仁寺開山前権僧正栄西禅師にしたがひて、教の外のむねをしり、

言のしたのみちをあきらめて、迦葉が靈山にいたり、なむぞ懐讓の曹溪にいたりしにことならむ。正脈ただちに通じ、単伝ひとりあり。

戒牒…参建仁寺采西僧正、礼為参学師。

祠堂…伝師之道、教戒亦精。

延宝…得法明菴、善持木叉、身心冰雪。

本朝…依附明菴、薰陶滋久、遂伝心要、又善毘尼。威儀氷雪。

諸祖…後聞建仁千光西禅師盛唱教外別伝、往而参礼。服勤数歳、遂受密記。

『舍利相伝記』によれば、明全は教家の学が砂を数える法でしかないとして、時に建仁寺開山として活動していた采西に参じ、ついには教外別伝・不立文字の宗旨を諦めたというのである。『戒牒奥書』でも「建仁寺の采西僧正に参じ、礼して参学の師と為す」と伝えている。これらによるならば、明全が采西に学ぶのは、はやくても采西が東山建仁寺を開創した建仁二年以後ということになる⁽⁸⁾。明全が采西に傾倒する背景としては、采西の持つ持戒堅固な清僧としての風貌に依るところが大であったものと見られ、すでに戒律にかなり精通していたであろう明全にとって、自らの意に充分に応える存在として采西が映ったのではなからうか。

『続日域洞上諸祖伝』ではとくに「服勤すること数歳、遂に密記を受く」と記するが、明全が采西に具体的に何年ほど

随侍したかは定かでない。明全は年齢的にいっても同門の退耕行勇や采朝らよりはるかに後輩であり、采西にとって比較的晩年の門人であったことは疑いない。采西示寂の建保三年の時点においてすら、いまだ三二年の若さに過ぎない。おそらくは建仁寺を中心に活動を開始した采西の姿に魅せられて禅門に転向したものと思われるが、明全としてはその後も比叡山との関わりは断絶することなく続けていたらしい。

ところで『戒牒奥書』では采西を単に参学の師とするにとどまるが、『舍利相伝記』では采西と明全の関係を、釈尊と摩訶迦葉あるいは曹溪慧能と南嶽懐讓の師弟関係に比している。教外別伝の旨を知り、采西の正脈を嗣続したとされるのであるから、明全は采西の印可嗣法を得ていたことになる。そのみならず『舍利相伝記』はさらに「正脈ただちに通じ、単伝ひとりあり」とあり、明全が采西の仏法をひとり正しく単伝したことを特筆している。これによれば、明全は采西に就いて禅の法門を充分に究めたことになる。

また『千光法師祠堂記』では「師の道を伝え、教戒亦た精し」とあるから、明全は采西門下でも、とくに戒律の面でもかなりの評価を得ていた存在であつたらしい。この点は『延宝伝燈録』でも「法を明菴に得、善く木叉を持し、身心冰雪たり」と記し、また『本朝高僧伝』でも「明菴に依附し、薰陶滋久、遂に必要を伝え、又た毘尼を善くす」と伝えている。

波羅提木又は戒のことであり、毘尼は律のことであるから、いづれも明全がきわめて戒律に精通し、持戒堅固な人であったことを強調するものである。

ちなみに^(二二六四—二二三五)瑩山紹瑾禪師は『伝光録』「第五十一祖永平元和尚」の章にて、

カノ明全和尚ハ顕密心ノ三宗ヲツタヘテ、ヒトリ榮西ノ嫡嗣タリ。西和尚、建仁寺ノ記ヲ録スルニ曰、法蔵ハタダ明全ノミニ囑ス、榮西ガ法ヲトブラハントオモフトモガラハ、スベカラク全師ヲトムロウベシ。

と伝えており、『舍利相伝記』とはいくぶん相違する記載をなしている。これによれば、明全は顕密心の三宗を伝えて、ひとり榮西の嫡嗣とされていたと述べている。しかも、榮西は「建仁寺記」を録して「法蔵はただ明全のみに囑した。我が法を尋ねようとする者は必ず明全を尋ねよ」とすら語ったと伝えられる。これは瑩山禪師の言であるだけに、きわめて説得力のあるものといえるだろう。いづれにせよ、明全は我が道元禪師が師と仰いだ人であり、榮西門下でも若手ながら抜群の機根を具えていたことはまちがいあるまい。

唄樹山満願寺の中興

ところで、これまで不明な点の多かった明全の伝記で新たに注目すべき記事として、明全が武蔵(埼玉県)国内に一寺

仏樹房明全伝の考察(佐藤)

院を中興していたことが判明している。その中興寺院とは現今、埼玉県児玉郡上里町に存する崇栄山陽雲寺にほかならない。『改訂史籍集覧』第一二冊「別記類第八四」に所収される撰者不詳の『武州陽雲寺記』には、

陽雲寺ハ元久二年、京都東山建仁寺明全和尚草創、唄樹山満願寺ト号ス。臨濟宗ニテ建仁寺末ナリ。元弘三年、新田公、境内ニ一字建、勝軍不動ヲ安置ス。百貫文ヲ賜ヒ、祈祷所トナス。時ニ畑六郎左衛門尉時能、本城ヲ守衛シテ当寺ヲ以テ植福場トナス。延元三年十月廿四日、時能、越前ニ於テ戦死。其臣児玉五郎左衛門ナル者、時能ノ首ヲ携来テ境内ニ葬ル。延元三年八月廿八日、新田義宗、勝軍不動堂ヲ造営ス。長祿元年二月廿八日、中興開祖祥貞和尚、今ノ曹洞宗ニ改ム。蓋シ明全ヨリ祥貞マテ十四世ニ及フ。爾無本寺ナリ。(中略)一開祖明全和尚へ伊州人、姓蘇氏。始仏樹房ト云。貞応二年四月入宋ス。嘉祿元年五月七日、宋ノ天童山ニ在テ示寂。四十二歳。臨濟宗ナリ。

という興味深い記事が見い出せる。これが史実であれば、これまであまり明確でなかった明全の初期の行実の一端が新たに解明されることになる。これによれば、明全は元久二年^(二二〇五)四月に武蔵国賀美郡金久保(金窪)村いまの埼玉県児玉郡上里町金久保に唄樹山満願寺を開創したとされるのである。

しかしながら、この唄樹山満願寺は実際には古く弘仁一一^(八二〇)年五月に慈覚大師円仁を勧請開山に仰いで開創された護国山

満願寺をその前身とし、⁽⁹⁾天台宗寺院として二七代にわたり続いた大刹であったとされ、第二八世として入寺した明全がこれを再建し、唄樹山満願寺と改名して天台宗から臨済宗の建仁寺末の寺院に改めたと伝承されている。

この点はさらに陽雲寺所蔵『崇栄山誌』⁽¹⁰⁾所収の『各大檀公開山歴住伝統譜』「当寺再興臨済開山同歴」に、実際に「当寺再興臨済開山建仁明全大和尚」として、

師者、京都東山建仁寺開祖榮西禪師ノ法嗣、同寺二世ナリ。始仏樹房ト称ス。伊州人。姓蘇氏也。元久二年二月、当寺二十七世慈珍僧都、師ノ道德ヲ称シ、寺ヲ師ニ譲ル。依テ是年四月十五日、師、当寺ヲ中興シ、開山慈覚大師二十八代ノ席ヲ継キ、開堂ノ式ヲ行ヒ、唄樹山満願寺、延暦・建仁両寺末ニ改。師、本朝貞応二年四月入宋、即チ太宋ノ嘉定十六年ナリ。本朝嘉禄元年、即チ太宋ノ宝慶元年五月七日、宋ノ天童山ニ在テ、師示寂。年四十二歳。又遠近二百数十有余ヶ寺ノ末寺アリシカ、曹洞ノ僧住山後ハ、自然ニ離末スト云。

と記され、より具体的に知られる。これによれば、元久二年二月に満願寺の二七世であった僧都慈珍が明全の道德に心服して寺を譲ったとされ、⁽¹¹⁾四月一五日に明全は二八世中興として開堂の式を行い、寺名を唄樹山満願寺と改称し、比叡山延暦寺と東山建仁寺の両寺の末寺としたというのである。

ところで問題なのは、元久二年とは明全が二二歳のときに

当たり、いまだ若齡すぎる感があり、開基年代には疑点も残ることである。ただ、明全は若くして諸方の学匠を渡り歩き、顕密の奥旨や定慧の深際を究め明めたとされるのであるから、その間に比叡山末の満願寺の慈珍に学ぶ機会が存し、その遺囑を親しく受けたのかも知れない。それが比叡山の相井房の明融を師として学んだ明全の行動としては相応しい。このときすでに明全が榮西に参じていたか否かは定かでないが、あるいは実際に明全が満願寺の住持に就くのは、いままし年限を置いてのことであったかも知れない。もっとも妥当な解釈として、明全が最晩年の慈珍に参学する機会を得、その縁故で後に満願寺の中興に拜請された際に、慈珍示寂の元久二年に遡って中興年時を定めたのではないかと推測するものである。⁽¹²⁾

建仁寺での位置

では榮西が建保三年七月五日に示寂した後、明全は建仁寺にて如何なる立場にあったのか。諸伝の中でこの間の事情を伝えるのはわずかに、

本朝：明菴遷化後、住建仁二僅八月。

諸祖：西帰寂後、尚居之多年。

という後代の二史料にすぎない。すなわち『本朝高僧伝』では「明菴遷化の後、建仁に住すること僅かに八月なり」とあ

り、『続日域洞上諸祖伝』では「西帰寂の後、尚お之れに居ること多年なり」と記されている。これらによるならば、明全は栄西の示寂した後、建仁寺の住職の地位にあったことになる。しかし、住持期間についてはわずかに八ヶ月に過ぎなかったのか、居すること多年であったのかも定かでない。仮に『本朝高僧伝』の説に従って、入末までの八ヶ月の建仁寺住持とすると、貞応元年七月より貞応二年二月までの住持ということになり、きわめて短期に限られていたことになるが、これが如何なる史料に基づいて決定されているのかも詳らかでない。

しかしながら、実際には明全が建仁寺において住持の地位にあったか否かについては曖昧なのである。すなわち現今に伝えられる史料では建仁寺歴住者の中に明全の名は見い出せない。いま『扶桑五山記』と『仏祖宗派図』と『正誤仏祖正伝宗派図』巻四などによって栄西以後の初期の建仁寺歴住者の名を示してみよう。すなわち『扶桑五山記』四によれば、

第二、禅慶末上禅陽房、嗣葉上。行勇禅師、建仁住持簿載此名、恐誤歟。

第三、道聖末上三諦房、嗣葉上。

第四、玄珍末上、嗣葉上。

第五、禅興末上、嗣葉上。

第六、嚴琳末上蓮実坊、嗣葉上。

仏樹房明全伝の考察(佐藤)

第七、円琳末上一葉坊、嗣葉上。

ということになり、また『仏祖宗派図』によれば、

二世禅慶・三世道聖・四世玄珍・五世禅興・六世嚴琳・七世円琳

となり、さらに『正誤仏祖宗派図』巻四によれば、

二世禅慶・三世道聖・四世玄珍・五世禅興・六世嚴琳・七世円琳

ということになる。このように二世善陽房禅慶・三世三諦房道聖・四世玄珍(玄珍)・五世禅興・六世蓮実房嚴琳(嚴珠)・七世一葉房円琳と、それぞれ栄西の門人らが名を連ねている

が、そこには明全の名は記されていない。もっとも二世に莊嚴房退耕行勇を載せる史料も存しており、初期建仁寺の歴住の名自体がきわめて流動的であった感は否めない。まして、諸史料からして、少ずしも実際の歴住者が先の入寺順でなされたとは見られないわけであるが、いずれにしても明全の名はそこに見い出されないのである。ちなみに大修館書店刊の『禅学大辞典』「付録」の建仁寺の世代表によれば、二世退耕行勇・三世道聖・四世玄珍・五世禅興・六世嚴林・七世円琳となっており、現今の建仁寺が二世に行勇をおく立場を取っていることが知られる。

ところで新出の鎌倉浄妙寺所蔵『開山行状并足利靈符』の「行勇禅師年考」の建保三年の項によれば、

過去牒云、夏六月五日、西祖寂于建仁（寿福）、此年、師兼匡三
 寿福・建仁。

とあり、また同じく同書の「開山勇禪師行状」にも、

建保三年、西師寂于建仁、師兼匡三聖福・寿福・建仁之席也。

とあるから、どうやら具体的には栄西が示寂した後、行勇が
 寿福寺と建仁寺および博多の聖福寺を兼ねて管轄することにな
 ったようである。しかし、実際には行勇がそのすべての寺
 院を見回することは不可能であるから、行勇が建仁寺の監寺と
 して実質的な運営を同門の後輩である明全に依託することは
 あったかも知れない。ただ、この点で問題となるのは、やはり
 「行勇禪師年考」の承久元年の項に、

過去牒云、此年、以建仁附蓮実房嚴林。

という記事が存していることであり、これによれば、承久元
 年以降の一時は嚴琳が建仁寺住職として活躍していたこと
 になる⁽¹⁴⁾。ここでもやはり明全の立場は微妙なものとなるの
 である。これらを考慮するなら、実際には明全が建仁寺の住
 持に就くことはなかったと見る方が妥当かも知れず、仮に住
 持の席に着いていたにしても何らかの理由で建仁寺住持者の
 名簿からその名を抹消されていることになろう。

しかしながら、明全が建仁寺の住僧の中でもかなりの地位
 にあったことは動かないものと見られる。当時の明全の地位
 の高さを示すものとして、『戒牒奥書』には、

明全入宋之時、後堀河院在位也。後高倉院為太上皇。全公、
 太上天皇奉授菩薩戒。

という記事が存しており、これは『続日域洞上諸祖伝』にも

「後高倉太上皇、聞三師道誓、詔受菩薩大戒」として受け

継がれている。後高倉上皇はもともと後鳥羽上皇の実兄であ

るが、守貞親王として皇位にも就かず不遇であったため、建

曆二年三月に栄西と親しい我禪房俊苳（不可棄法師）を受戒師

として落飾出家しており、法名を行助と称している。

承久の乱後、後鳥羽上皇の配謫の間に、承久三年八月には

この行助入道新王は鎌倉方の支援で太上天皇の尊号を得てお

り、後高倉院として実子の後堀河天皇を補佐して院政を敷

くのである。そんな中で明全は承久元年に後高倉上皇に菩薩

戒を授けたとされるのであり、俊苳に次いで重ねて戒法を授

けたことになろうか。菩薩戒は多師の重授であつてもそれほ

ど不自然ではないから、後高倉上皇が建仁寺の若き統率者の

一人であった明全に心酔する可能性も高かったものと見られ

る。ただし、一説に俊苳が菩薩戒を授与した時に明全もその

場に同座していたのがいくぶん変わって伝えられたのではな

いかという解釈も存する。

道元禪師の参学

ところで明全といえば道元禪師を育成したことで名高い

が、その道元禪師が明全の師である栄西に学ぶ機会が存したか否かは、古来、道元禪師伝の大きな問題となっている。それは『宝慶記』の冒頭に、

後入ニ千光禪師之室、初聞ニ臨濟之宗風。今随ニ全法師ニ而入ニ炎宋。

という表記があることによつて栄西への参学が強調されたためである。また古写本『建擲記』にも、

行状記云、入ニ千光禪師之室、初聞ニ臨濟ノ宗風。千光ハ建仁寺開山之御事也、又明菴和尚トモ申ス。三年今年七月五日、建仁寺開山栄西和尚、七十五歳ニシテ涅槃アリ。然レバ建仁開山ノ会下ニ在ス事、四ヶ年也。(瑞長本)

とあり、同じく栄西に参学したかの表記が存するほか、記事にかなりの混乱がみられる。ところが道元禪師はあくまで栄西を「師翁」と称しており、本師とは扱っていない。とりわけ『道元和尚広録』巻五の「明庵千光禪師前権僧正法印大和尚位忌辰上堂」には「師先学ニ仏樹和尚、仏樹者、明庵門人也」という注記が存し、栄西への参学は記されず、栄西の門人としての明全との関わりのみが強調されている。ここでは道元禪師が直接に栄西を見知ることにはなかったか、あるいは仮に栄西に学ぶ機会が存したにせよ、それはあくまで会下の末席に列する程度のことであり、いまだ親密な師資関係を持つことなどはなかったものと見ておきたい。

したがって、建仁寺に投じた道元禪師に決定的な影響を与えたのは、あくまでも明全であったと見なければならぬ⁽¹⁷⁾。そして、また道元禪師の栄西に対する敬慕の念も実質的には明全を介してのものであったといえる。この点は『三大尊行状記』『道元和尚行状記』にても、三井寺(園城寺)の僧正公胤の誨励の後に、

建保五年丁丑、十八歳秋、始離ニ本山、投ニ洛陽建仁寺、從ニ明全和尚。

とあり、明全との関わりのみが記されるにすぎない。ちなみに古写本『建擲記』でも、

建仁寺二代ノ御名ハ明全、又ハ仏樹トモ申、又ハ行勇禪師トモ申也。(中略)五年八月廿五日ヨリ建仁寺二代和尚ノ室ニ入給ト、云々。此已前ワ、山ト建仁寺トノ間ヲ往来アリ、覺カ、十八歳ノ比ヨリ、渡唐ノ望ミ在テ、便チ船ヲ待給ウ。(中略)師、公胤ノ教示ヲ聞テ、十八歳ニシテ本山ヲ出テ建仁寺ニ掛錫シ、明全ニ随順シテ、猶ヲ顕密ノ奥源ヲ窮メ、律蔵ノ威儀ヲ習イ、臨濟ノ宗風ヲ聞給イ、即黄龍ノ十世ニ烈シマシマス者也。

とあり、また瑩山禪師の『伝光録』「第五十一祖永平元和尚」の章にても、

因テ十八歳ノ秋、建保五年丁丑八月二十五日ニ、建仁寺明全和尚ノ会ニ投ジテ、僧儀ヲソナフ。彼ノ建仁寺僧正ノ時ハ、モロモロノ唱導ハジメテ参ゼシニハ、三年ヲヘテ後ニ衣ヲカヘシ

ム。然ルニ師ノイリシニハ、九月ニ衣ヲカヘシメ、スナハチ十一月ニ僧伽梨衣ヲサズケテ、以テ器ナリトス。

と伝えている。さらに流布本『洞谷記』所収「洞谷伝燈院五老悟則并行状略記」の「曾祖越州吉祥山永平寺開山和尚」の章でも、

始離^三本山、投^三建仁寺明全和尚、受具入衆。

と記されている。『伝光録』と古写本『建撕記』はともに道元禪師が正式に明全に師事したのを建保五年八月二五日のこととしている。とりわけ『伝光録』では、かつて栄西の在世中には初参の者に三年間は衣（袈裟）を変えしめなかったのに対して、明全は道元禪師が会下に投ずると九月には衣を変えしめ、一月には僧伽梨衣を授けたとされるのであり、早くから道元禪師をきわめて器重したことが知られる。

また古写本『建撕記』で明全を行勇と混乱している面が見られるのは問題であるが、明全と道元禪師らはすでにこの時期より入宋の望みをもって船の都合を待っていたという記事は注目される。道元禪師の一八歳は明全の三四歳に当たるから、入宋計画は実に足掛け七年の歳月を費やした計算になる⁽¹⁹⁾。

ところで明全や道元禪師らが入宋の計画をなしていたことに関連して注目すべきは、退耕行勇の法嗣である大歇了心（般若房）が、明全らに先だって入宋帰国を果たしていること

であろう。もっとも『開山行状并足利靈符』の「行勇禪師年考」によれば、行勇も元暦元年春三月に入宋し、文治四年秋八月に帰国しているらしい⁽¹⁹⁾。ただし、このときの行勇の入宋はいまだ栄西門下に投ずる以前であり、禪宗とは直接に関わらなかつたようである。これに対して、了心については『延宝伝燈録』巻六や『本朝高僧伝』巻一九に簡略な伝が存しており、それらによれば、了心は入宋して中国禅林の規矩を修学して日本に禅規を広め、それまでの兼宗禅の色彩を脱却して純禅の立場を明確にしたとされる⁽²¹⁾。ところが『開山行状并足利靈符』の「行勇禪師年考」の建保三年の項には、

又云、此年、心大歇從^三宋国^一帰、參^三堂寿福^一、高僧師伝云、了心從^三勇公^一究^三明已事^一、入宋遍遊^三禅林^一帰、首^レ衆亭^三寿福^一。出^三世本山^一、後住^三建仁^一。

という記事が見い出せるのであり、了心が南宋より帰国した年時が明確に知られるわけである。この記述によって、了心が明全らに先立って栄西の晩年に入宋を果たしていたことが判明するとともに、その入宋が建仁寺・寿福寺教団と密接に関わっていたことが推測される。晩年の栄西が兼宗禅的性格を脱却して中国風の純粹禅を導入せんとする意欲に燃えて了心に視察を命じたことを示すものであろうか。とすれば、その了心の帰国後に入宋する同じ栄西門下の明全らも、また了心より何らかの南宋禅林に対する知識を得ていたと見るのが

自然であろうし、栄西示寂後の僧団を統率する行勇の意向をも十分に受けていたものと解さねばならない。

ところで道元禪師は明全に就いて、とりわけ如何なる行法を修めたのであろうか。道元禪師は『辨道話』において、

予、発心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらひき。ちなみに建仁の全公をみる。あひしたがふ霜華すみやかに九廻をへたり。いささか臨済の家風をきく。全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり、あへて余輩のならぶべきにあらず。

と自ら語っており、発心求法の念で教家の学僧知識を訪ねた後に、建仁寺の明全に見えて九年間を過ごし、その間に臨済の家風を聴聞したとする。そして明全が栄西の上足として独り無上の仏法を正伝していたことを特筆し、あえて他の栄西門下の並ぶべき者がなかったことを強調しているのである。

この文は明全に「建仁」の肩書きを付していること、また道元禪師が明全に参学していた期間を九年間としていることなど、興味深い事実も伝えている。霜華九年とはおそらく先の『三大尊行状記』との関わりからいっても、建保五年の参学より明全が在宋中に客死するに至る九ヶ年を意味するものとみられる。⁽²²⁾

もつとも、この道元禪師が明全の席下で学んだことがらを『三大尊行状記』では、

猶極^ニ顕密之奥源^一、習^ニ律蔵之威儀^一、兼聞^ニ臨済之宗風^一、即列^ニ黄龍之十世^一。

と記しており、この点は古写本『建掇記』も同様である。また瑩山禪師の『伝光録』「第五十一祖永平元和尚」の章でも、

師、其ノ室ニ参ジ、重テ菩薩戒ヲウケ衣鉢等ヲツタヘ、カネテ谷流ノ秘法一百三十四尊ノ行法護摩等ヲウケ、ナラビニ律蔵ヲナラヒ、マタ止観ヲ学ス。ハジメテ臨済ノ宗風ヲキキテ、オホヨソ顕密心ノ三宗ノ正脈ミナモテ伝受シ、ヒトリ明全ノ嫡嗣たり。

と伝えており、同じく「第五十二祖永平昇和尚」の章においても懐辨の言として、

二代和尚ノ尋常ノ垂示ヲキキシニ曰ク、仏樹和尚ノ門人数輩アリシカドモ、元師ヒトリ参徹ス。元和尚ノ門人マタオオカリシカドモ、ワレヒトリ函丈ニ独歩ス。

とある。また『洞谷記』の「永平寺開山和尚」の章でも、

尚極^ニ教意^一、魚学^ニ律蔵^一、聞^ニ臨済宗風^一。

と記されている。これらによれば、道元禪師は明全の室に参じて重ねて菩薩戒を受け、その衣鉢などを伝えた⁽²³⁾とされるのであり、臨済の宗風はもちろんのこと、さらに台密谷流の秘法一三四尊の行法護摩などを受け、ならびに律蔵を習い、天台止観の法門も学したとされる。このように道元禪師は明全より顕密心の三宗の正脈をすべて伝授し、ひとり明全の嫡嗣

としての位置を得たわけである。

この記事は明全が必ずしも禅のみを標榜していたわけではなく、栄西以来の顕密禅律の四宗兼学の立場を守っていたことを伝えるものである。明全の立場を他の栄西門下から切り離して純粹禅の主唱からのみとらえようとするのには問題もあるわけである。さらに明全には単に道元禅師のみならず、ほかにも数人の門人が存したことも知られるのである。

比丘戒牒のこと

ところで『続日域洞上諸祖伝』には「正治己未、又往南都、登壇円具」という表現がみられる。これは明全が正治元年に南都に赴いて戒壇にて比丘戒を受けたというものである。実際に明全には東大寺戒壇の比丘戒牒なるものが伝えられており、「興福寺大徳辨基律師、興福寺大徳勝還律師、興福寺大徳林祐律師、東大寺大徳宗源律師、元興寺大徳経幸律師、招提寺大徳浄俊律師、東大寺大徳浄祐律師、大安寺大徳教元律師、東大寺大徳戒禅律師、東大寺大徳道昭律師、薬師寺大徳浄盛律師」という南都の興福寺・東大寺・元興寺・招提寺・大安寺・薬師寺の一人の戒師の名が記された後に、

沙弥明全、稽首和南大徳足下、

竊以、三学殊途、必会通於漏尽、五乘広運、資戒足以為

先。是知、表無表戒、務衆行之律梁、願無願心、析七支之

勝躪。但明全宿因多幸、得逢法門、未登清禁、夙夜剋悚。今契正治元年己未十一月八日、於東大寺戒壇院、受具足戒。伏願大徳慈悲拔濟。少識和南疏。

正治元年己未十一月八日

沙弥明全疏

という明全の疏が記されている。この戒牒によれば、明全は正治元年一月八日に東大寺の戒壇にて具足戒（比丘戒）を受けたことになる。しかし、この戒牒は実際には偽文書といつてよいものである。⁽²⁴⁾なぜなら、すでにみたごとく明全はこの年に一六歳で比叡山戒壇にて円頓菩薩戒を授与されているであり、同じ年に東大寺の戒牒を得ることは不可能である。この間の事情を道元禅師は『戒牒奥書』にて、

全公本受天台山延曆寺菩薩戒。然而宋朝用比丘戒、故臨入宋時、書持此具足戒牒也。宋朝之風、雖習学大乘教、僧皆先受大僧戒也。只受菩薩戒之僧、未嘗聞者也。先受比丘戒、後受菩薩戒也。受菩薩戒、而為夏臘、未嘗聞也。

と説明しており、その実態を知ることができる。これによれば、明全は延暦寺で円頓菩薩戒を受けていたわけであるが、入宋に当たって、南宋に通用する比丘戒の必要性から、過去に遡って南都戒壇において戒牒を授与されていたことにして作成されたものと見なければなるまい。まさにこの比丘戒牒は入宋のために必要な携帯物であったわけである。したがって、『続日域洞上諸祖伝』の先の記事は、その間の実情を知

らずに、単に比丘戒牒の存在のみで記されたものにすぎず、正式には誤りということになる。

ともあれ、当時、入宋を志す日本僧は南宋の実情を十分に熟知し、準備万端を整えて入宋するのが当たり前であった。とすれば、明全ひとりに限らず、道元禪師やともに入宋した廓然・高照らもまた同様の比丘戒牒を用意して入宋の途に着いたと考えるのが常識であろう。⁽²⁵⁾南宋での実情は当然、数年以上をかけて念入りな入宋計画をなしていた明全や道元禪師らには十分に熟知されていたものと解さねばなるまい。

戒牒は本人が亡くなった時にともに荼毘に付されるのが一般的であり、ほとんど後世には残されないすじのものである。明全の場合はその特異な示寂の状況から、本来、残るはずのなかった戒牒が保存されて後世に伝えられたわけである。もともと仮の戒牒であり、また後の道元禪師が円頓菩薩戒の立場に立っていることなどからしても、伝記史料に道元禪師の比丘戒牒のことが記されていない⁽²⁶⁾も何ら不自然ではないのではなからうか。

道元禪師への師資相伝

ところで古写本『建撕記』には、明全が道元禪師に師資の相伝をなしたという記事が存する。すなわち、承久三年^(三三三)の箇所には、

同三年九月十三日、建仁二代ヨリ師資ノ相伝アリ。永平二代并和尚ノ挙揚アリタルト介和尚宣給也。

という記述が存している。これによれば、道元禪師は承久三年九月一三日に建仁寺二世の明全より師資の相伝を受けたというのである。これは明全から師資の印可を得たという意味であろうか。これは徹通義介が永平寺二代の孤雲懷辨より示された内容とされる。この間の実情を如実に示す資料が現在、永平寺に「伝明全筆師資付法偈」として伝えられ、

語法非法、非法亦非、心境俱亡、靈月洞然。

貞応二年正月七日(花押) 高声談話、上人御房。

承久三年九月十二日、伝授師資相承一偈曰、不思善不思惡、

正当恁麼時、如何本命元辰。本命元辰、是則禪宗之眼目、得脱之根源。雖得百千兩金、輒不可傳授之而已。(花押)

というものであり、これが明全の自筆か否かには問題も残るが、明全にちなむ古文書であることはまちがいない。この点はさらに『正法嫡伝獅子一吼集』巻下に、

吾曩祖永平元古仏、初紹明全国師、伝後一紙曰、承久三年九月十二日、伝授師資相承語云、不思善不思惡、正当恁麼時、如何本命元辰。本命元辰是則禪宗之眼目、得解脱之根源。雖得百千兩金、輒不可傳授之而已。偈云、悟法非法、亦非心境、俱亡靈月洞然。

日本貞応二年正月七日

明全判

として記載されている。日付が九月一二日として一日ずれてはいるが、これが明全が道元禅師に付与した師資相承の語であることになろう。先の永平寺の「伝明全筆師資付法偈」では肝心の相承偈の部分が前に置かれており、「高声」以下の八文字は後代の付加であろう。また『正法嫡伝獅子一吼集』では完璧な四句の付法相承偈とはなっていないのである。ともあれ明全は本命元辰を禅宗の眼目とし、解脱を得る根源としており、当時の明全の禅思想の一端を知ることができる。

そして実はこの師資相承の語は栄西が虚庵懐敏と交したときされる問答に基づいており、明全が師栄西の語をもって道元禅師に付与していることが明らかとなっている。⁽²⁷⁾

ところで承久三年に伝授がなされたとされるものの、さらに貞應二年正月七日の明全の在判が存することから、入宋を直前にして明全が正式にこの付法偈を付して道元禅師に授与していることになる。こうした一連の明全の行動には、栄西門流としての意識を道元禅師に明確に植え付けておきたい志向が存したものとみられる。

ちなみに『三大尊行状記』には「兼聞臨濟之宗風、即列ニ黄龍之十世」と伝えており、道元禅師が明全より臨濟の宗風を聞き、黄龍派一〇世に列したという内容を伝えているが、これは先の記事に合致するものである。ただし、訂補本『建搨記』によれば「師資の印可アリト」とあり、さらに

「マタ仏祖正伝ノ大戒ヲ明全ニ伝授セリ」となっており、栄西・明全と伝えられた仏祖正伝菩薩大戒を伝授したことになっている。⁽²⁸⁾あるいはこれは伝戒を付法のごとく記し伝えたものかも知れない。そのいずれにせよ道元禅師としてはいまだ真の安心は得ていなかったのであるから、この師資相承は形式的なものであった感をまぬがれないであろう。

本師明融との関係

すでに述べたごとく明全の本師は比叡山横川相井房の明融という人であるが、この明融との間で明全は入宋に先立って支障が存したらしい。明全らの入宋する直前に明融が瀕死の重病となり、明全は入宋を断念するか否かの選択に迫られたのである。すなわち、かなり長文の引用にわたるが、『正法眼蔵随聞記』巻六（長円寺本）には、

示云、先師全和尚入宋セントセシ時、本師叡山ノ明融阿闍梨、重病ニ沈ミ、ステニ死ナントス。其時コノ師云、我既ニ老病ニ沈ミ、死去セントスル事近ニアリ。汝デ一人老病ヲタスケテ、冥路ヲトブラフベシ。今度ノ入唐暫ク止テ、死去ノ後、其本意ヲトゲラルベシ。時ニ先師、弟子及同朋等ヲアツメテ商議シテ云、我幼少ノ時、双親ノ家ヲ出デテ後、此師ノ覆育ヲ蒙テ今成長セリ。世間養育ノ恩尤モ重シ。又出世法門ノ事、大小権実教文、因果ヲワキマヘ、是非ヲ知テ、等輩ニモコエ、名誉ヲ得タ

ル事モ、又仏法ノ道理ヲ知テ、今入宋求法ノ志ヲオコスマデモ、彼ノ恩ニ非ズト云コト無シ。然ルニ今年ステニ窮老シテ、重病ノ牀ニ臥シ給ヘリ。余命存ジガタシ、後会期スベキニ非ズ。ヨテアガチニ是ヲトドム。彼ノ命モソムキ難シ。今不顧身命入宋求法スルモ、菩薩ノ大悲、利生ノ為也。彼ノ命ヲソムキ、宋土ニユカン道理如何ン。各各存知ヲノベラルベシ。時ニ人人皆云、今年ノ入宋止ルベシ。老病已ニ窮レリ、死去定ナリ。今年バカリ止テ、明年ノ入唐尤可レ然。彼ノ命ヲモソムカズ、重恩ヲモ忘レズ。今一年半ノ入唐遅延、何ノサマタゲカ有ン。師弟ノ本意モ相違セズ、入宋ノ本意モ如意ナルベシ。時ニ我レ末臘ニテ云、仏法ノ悟リ、今ハサテ有リナントオボシメサルル義ナラバ、御トドマリ然ルベシ。先師ノ云、然カ也。仏法修行ノミチ、是程ニテサテモ有リナント存ズ。始終如レ是ナラバ、サリトモ出離ナドカト存ズ。我云ク、其ノ義ナラバ御トドマリ有ルベシ。

時ニ先師、皆ノ議ヲハリテ云、各各ノ議定、皆トドマルベキ道理ナリ。我が所存ハ然ラズ。今度止リタリトモ、決定死ヌベキ人ナラバ、其ニヨリテ命ノブベカラズ。又我トドマリテ看病外護センニヨリテ、苦痛モヤムベカラズ。又最後ニ我がアツカヒ勸メンニヨリテ、決定生死ヲ可レ離道理ニモナシ。只一旦命ニ随ヒタルウレシサバカリカ。是ニヨリテ出離得道ノ為ニ一切無用也。誤テ求法ノ志ヲサヘテ、罪業ノ因縁トナルベシ。然ニ若入唐求法ノ志ヲ遂テ、一分ノ悟ヲモヒラキタラバ、一人有漏ノ迷情ニコソタガフトモ、多人得道ノ縁トナルベシ。功德若勝レ

バ、又師ノ恩報ジツベシ。タトヒ又渡海ノ間ニ死テ、本意ヲトゲズトモ、求法ノ志ヲモテ死セバ、玄奘三蔵ノアトヲモ思フベシ。一人ノ為ニ、ウシナヒヤスキ時ヲ空クスグサン事、仏意ニカナフベカラズ。ヨテ今度ノ入唐、一向ニ思ヒキリヲハリヌ、トテ、終ニ入宋シキ。先師ニトリテ真実ノ道心ト存ゼシコト、是等ノ心也。

という有名な一段が存している。⁽²⁹⁾これによれば、明全の本師であった比叡山の明融は、明全らが入宋するに当たって重病となり、死の淵にあつたことが知られる。明融は愛弟子の明全に対して、看病と死後のことを済ませて後に、入宋の途に着いてほしい旨を懇願したらしい。この依頼に対して、明全は弟子や同朋を集めて商議し、明融への師の恩に酬いるために日本に留まるべきか、菩薩の大悲の立場から利生のために入宋すべきかに悩んでいる。時に弟子や同朋らの多くは、一年間、入宋を控えたほうがよいと進言したらしい。ただ道元禪師のみは、仏法修行の次元からより良いと思われる方法を選ぶべきだと勧めたとされる。

このとき明全は看病が出離得道のためには一切無用であり、たとえ一分の悟りといえども開いたならば、それこそ明融の師恩に酬いることであるとして、入宋の途に着くのである。明全が「たとえまた渡海の間死して、本意を遂げなかつたとしても、求法の志をもって死んだなら、玄奘三蔵のあ

とかたを思うべきである。ひとりの人のために失い易き時間を空しく過ごしてしまうことは仏意に契うものではない。よってこの度の入唐は一向に思い切り了わった」と述べているのは、この人の生きざまが人情を超えて仏道を第一に置く崇高な哲理に貫かれていた証しといえよう。

この明融に関する記事を伝えるのは、諸伝ではわずかに『続日域洞上諸祖伝』のみであり、そこには、

師曾有遊宋之志、然以業師老病已逼呼吸、足将進数越超焉。
貞応二年癸未、奮然決志。

と記されており、『正法眼蔵随聞記』の記載を受けつつも、明全が受業師明融の老病により遊宋の志をしばしば中断せざるを得ず、貞応二年に至ってようやく奮然と志を決することができたとする。しかし、この記述ではかなり穿ち過ぎの感があり、『正法眼蔵随聞記』の伝える切迫感が薄れてしまう。

ともあれ、明全は明融の末期の願いを振り切ってまで入宋することを覚悟したわけであり、如何にきびしい仏道への信念を抱いて入宋の途に着いたかが窺われるとともに、それが後の道元禅師に如何に印象的なできごととして受け止められたかが如実に伝えられる逸話といえる。後にその明全がついには彼の地に客死するに至ることを思うとき、一層、この逸話が悲しくも崇高な生きざまとして伝わってくる感を禁じ得ない。道元禅師にとっても、この一段の事は生涯に忘れ得ぬ

できごとであったものと見られる。

実相山正法院の開創

すでにみたごとく明全は若くして武蔵に満願寺を中興していたわけであるが、さらにその後、常陸の地とも関わり持つに至っている。現在、茨城県常陸太田市に臨済宗円覚寺派の万秀山正宗寺という寺院が存しているが、この寺は古く延長元年三月に鎮守府將軍の平良将が常陸佐都西郡太田郷増井村に律寺の増井寺を開創したことに始まるとされ、後に真言密教の大瑞山勝樂寺と改められて佐竹氏の帰依を得てその菩提所とされるに至っている。⁽³⁰⁾

鎌倉時代になると、臨済禅の興隆とともに、勝樂寺内に子院として禅院である正法院が開創されているが、正宗寺所蔵『佐竹系図』の佐竹別当秀義の条には、この正法院の創立に
関して、

（前略）貞応二年癸未八月、正法院創立、号実相山、請建仁
明全和尚、称開山第一世矣。嘉禄元年十一月十八日、鎌倉卒。
本国葬送、葬正法院新廟。法名秀山蓮実、号正法院。行年七
十五。抑々正法院創建勸請書、開山明禅師入宋ノ法語、大鐘ノ
銘文ニ詳記ス。

という注目すべき記事が伝えられている。⁽³¹⁾ 他の『佐竹系図』の諸本にはこの正法院と明全に関する記事は見い出せない

が、正宗寺所蔵のものであるだけに、正宗寺の前身である正法院について独自の詳しい事情を記していたとしても何ら不思議ではなからう。この記事によるならば、佐竹秀義は貞応二年八月に実相山正法院を開創していることが知られるのであり、しかもその開山第一祖として京都建仁寺の明全を拝請したというのである。

佐竹秀義は佐竹四郎隆義の子で佐竹氏の第四代の当主であり、かつて源頼朝が伊豆にて蜂起した際に、平家方に着いたため治承四年一月に頼朝に攻められ、一時は所領を失っているが、文治五年に頼朝が奥州(岩手県)平泉の藤原泰衡を攻めた際に頼朝の軍に駆せ参じたために、その後は鎌倉殿の御家人となっている。そして美濃(岐阜県)山田郷の地頭職を拝領しているらしい。⁽³²⁾

ただ、問題なのは貞応二年といえは明全が道元禅師らを伴って入宋の途に着いている年に当たっていることである。後に示すごとく明全はこの年の二月二二日には京都の地を離れているのであり、ここに記される八月の時点には、明全はすでに明州(浙江省)慶元府鄞県の天童山景德寺に掛錫している。したがって、明全が八月に常陸の正法院の伽藍落慶の式に赴くことはできないことになる。ならば、先の記事はまったく根拠のないものなのであろうか。

だが、問題は正法院を創建する際の明全への開山要請の勸

請書と、明全の入宋の際の法語が大鐘の銘文に詳しく記されていたとされる点であろう。少なくともこの秀義の勸請書と明全の法語を刻んだ銘文は正法院の寺宝として長らく保存されてきたことが知られるのである。⁽³³⁾

勝楽寺の子院にせよ、一寺院が建立されるには少なくとも数ヶ年は要したはずである。明全を開山に招くとすれば、早くから佐竹氏側より開山の要請が勧められていたものとみられる。時あたかも承久の乱の直後であり、鎌倉武士の地位がしだいに高まっていく時期に相当している。

こうした状況を踏まえるなら、佐竹秀義が当時かなり著名な活動をなしていた建仁寺の明全を自ら開創した正法院の開山に拝請する可能性は十分に推測されるものである。この点、正宗寺所蔵の『佐竹系図』が明確に明全の入宋時の法語を大鐘に刻んだとする記事を伝えているのは、その史実性をより堅固なものにしているといえる。おそらく佐竹秀義としては、幕府と栄西門流との深い関わりを意識して、同じ立場で禅宗への接近を求め、栄西の高弟で建仁寺にてその実力を発揮し始めていた明全に白羽の矢を当て、あらかじめ明全を開山に請するべく正法院の草創を企てたのではなからうか。そして、実際には伽藍の落慶が遅れたがために、明全は法語を付与するのみで正法院には赴かず、入宋するはめになったのかも知れない。おそらく明全の弟子で佐竹氏ゆかりの禅者

がその依託を受けて監寺として正法院に止住することになったものと推測される。

あるいは明全の入宋に際しても、正法院の佐竹氏側や先の満願寺の檀越などから渡航費の一部補助などがなされていた可能性も推測されよう。道元禅師が出身の久我氏の俗縁との関わりなどにより渡航費用を捻出したという説が存するが、⁽³⁴⁾

おそらく明全にも同様に檀越による渡航費の外護が存したのもと思われる。ともあれ、この記事は入宋直前の明全に対する評価がかなり高かったことを示すものでもあり、佐竹氏が鎌倉方に例を習って、早くに栄西門下のつぎの時代を担う存在として明全に白羽の矢を当てた点で注目すべき事跡といえよう。

余談ながら、その後、この明全ゆかりの実相山正法院はしだいに荒廃していったようである。正宗寺所蔵の『寺蹟由来記』には、

弘安八乙酉年、常陸介行義、正法院再興建設シ、山号改_三革南明_一、自_レ是号_三南明山正法禅院_一、増井村三百貫寄進ス。正安三年

中、常陸介行義、那珂波阿西郷六百貫、正法院_ニ寄進ス。⁽³⁵⁾

とあるから、弘安八年に至って第八代の佐竹彦次郎行義（法

名は正山行義）がこの正法院を再建しており、山寺号を南明

山正法院と改めたことが知られる。行義はこのとき増井村の

三〇〇貫の地を寺領に寄進しており、さらに正安三年にも那

珂波阿西郷の六〇〇貫の地を寄進したと伝えられる。⁽³⁶⁾ 再興された正法院に如何なる系統の禅者が住持として拜請されたのかは定かでないが、あるいはこの時点ではすでに常陸における明全の系統は断絶して久しかったのかも知れない。

院宣と下知状

明全らは入宋を志してから、着々とその準備を進めていたに違いない。おそらくは中国語や中国宋朝の事情などにも十分に修得精通していたはずである。かつて建仁寺に寓居して栄西とも親しかつた東山泉涌寺開山の俊苒に道元禅師が学んでいた形跡も存している。⁽³⁷⁾ あるいは明全らが入宋する数年前に帰国している同じ栄西門流の大歇了心なども関わっていた可能性も存するなど、入宋渡航経験者に学ぶことも多かったはずである。

ところで、入宋には朝廷や幕府の許可がなければならぬ。明全らは渡航の書類を整えて、そのすじに提出していたわけであり、その際の許可状の写しが伝えられている。すなわち大久保道舟編集『曹洞宗古文書』上巻によると、朝廷からは後高倉上皇の院宣が下っており、その内容は、

建仁寺住侶明全、相_三伴両三之門弟_一、為_三入唐_一、趣_三博多之津_一、西海道之路次、津津関関等事、無_三其煩_一、可_レ令_三勸過_一者、依_三院宣_一、執達如_レ件。

貞応二年二月廿一日

右兵衛督（花押）

というものであった。後高倉院はすでにみたごとく明全とは因縁浅からぬ人物である。また幕府からは六波羅探題より、建仁寺住侶明全・道元・廓然・高照等、為渡海二下向西海道、路次関関泊泊無煩可勘過之状如件。

貞応二年二月廿一日

武蔵守（花押）

相模守（花押）

という下知状が下っている。いわゆる北条相模守時房と北条武蔵守泰時の名による許状である。時にこの院宣と下知状は貞応二年二月二一日付けとなっており、実に出発の前日というあわただしいものであったことが知られる。ちなみに後高倉院は同年五月一四日には四五歳の若さで崩御している。

ところで、先の院宣と下知状はともに写しであって原本ではない。原本は附箋によれば元禄九年三月九日の永平寺の火災で焼失し、同寺三九世の承天則地による火災以前の写しによつて後世に残されたとされる。ただし、訂補本『建徳記』によれば、永平寺の火災で原本が焼失したのは正徳四年三月三日であったと伝えられる。⁽³⁸⁾

ところで注目すべきは、両文書ともにあくまで明全を門弟の道元禅師らと同じく建仁寺の住侶としての立場で入宋の途に着くことを認可しているのであり、そこには住職の肩書きなどは存しない。この点でも明全が建仁寺の正式な住持の位

置にあったか否かは曖昧なのである。

また、下知状に道元禅師とともに名の記される廓然と高照の二人に関しては、院宣では明全の門弟と明確に記されているものの、如何なる素性の人物であったかも定かでない。ただ、明全が道元禅師とともに入宋の一員に加えている点からしても、この二人がかなりの力量を有する高弟であった可能性は強い。

入宋と天童山掛搭

入宋計画を進めていた明全や道元禅師らは商船の都合なども揃って、ようやくその機会が巡ってきたらしい。明全が入宋に至る過程を『舍利相伝記』は、

ここに貞応二年みづのとひつじ二月二十二日、建仁寺をはなれて、はるかに大宋国におもむく。五月十三日に慶元府太白名山天童景德寺にいたる。このところに錫をとどむるゆゑは、このみぎり、かの本師千光の旧游なればなり。もて歳華をおくり、やや功夫をつむ。

と伝えている。これによれば、明全は貞応二年二月二二日に道元禅師らとともに建仁寺を離れ、南宋へと旅立っているのであり、この点は諸伝にても、

戒牒：貞応癸未二月廿二日、出建仁寺、赴大宋国。見年四十歳。

延宝…貞応二年、率道元・廓然・亮照三同友、截海入宋、

歴遊諸師之門^一。

本朝…貞応二年、誘永平道元、帆海入宋、歴遊諸老之門^一。

諸祖…二月二十二日、遂同道元・高照・廓然等、出建仁赴^二

博多、附載于商船放洋。風浪歴日、到明州、乃寧宗

嘉定十六年也。

とほぼ同様の記事となっている。その具体的な行程に関して
は定かでないが、瑩山禅師の『伝光録』の「永平元和尚」の
章では、建仁寺の祖塔すなわち栄西の墓塔を礼辞して宋朝に
赴いたとする⁽³⁹⁾。『続日域洞上諸祖伝』によれば、建仁寺を出
て太宰府（福岡県）博多に赴き、それより商船にて航海し、明
州慶元府の地に至ったとする。この点は先の院宣や下知状の
記載からしてまちがいなからう。

慶元府港に到着した明全は、ただちに天童山に赴いたので
はないらしい。すなわち『戒牒奥書』によれば、

全公入宋之時、乃大宋嘉定十六年癸未也。初到明州景福寺^一。

于時講師妙雲講師為堂頭^一。

とあり、これを受けて『続日域洞上諸祖伝』にも「初詣妙
雲講師於景福寺」とあるから、明全ははじめ慶元府城に存
した景福律寺を訪れ、講師で堂頭の妙雲に謁していることが
わかる。この景福寺に関しては、『宝慶四明志』卷一一「郡
志」の「寺院」（十方律院）によれば、

景福寺。子城南二里半。旧号水陸蓮華院。皇朝建隆二年建、

大中祥符三年改賜今額。常住田五十畝。山無。

とあり、また『延祐四明志』卷一六「釈道巧上」「在城寺院」
の「律十方院」にも、

景福寺。在東南隅。旧号水陸蓮花院。宋建隆二年建、大中祥
符三年改今額。皇朝至元十九年火。

とあることから、景福寺はまさに慶元府の子城の南二里半ま
たは東南隅に存した十方律院であったことがわかる。もと水
陸蓮華院と号し、北宋の建隆二年の創建で、大中祥符三年に
景福寺と改められている。明全らが赴いた頃には常住田五〇
畝を有していたとされる⁽⁴⁰⁾。

この景福寺はかつて我禅房俊苒らも入宋時に一時、掛錫し
ている由緒ある律院⁽⁴¹⁾であり、そうした因縁により明全はこの
寺院に最初に赴いたものと思われる。景福律寺とはあるいは
当時、日本や高麗から入宋した僧などに対する受け入れのた
めの施設ともなっていたのかも知れない。

『舍利相伝記』によれば、明全が明州鄞県東の天童山景德
禅寺に掛搭したのは五月一三日のこととされる。明全が天童
山を掛搭の地に選ぶ背景は、かつて天童山が先師栄西の旧遊
の地であったことにちなむ。栄西はこの天童山にて虚庵懐敏
より臨済宗黄龍派の禅を伝えて帰国しており、帰国後も天童
山に材木を送り、千仏閣の修造に尽くしており、そのことは
楼鑰（攻媿主人）の『攻媿集』卷五七「記」の「天童山千仏閣

記」にも記されて、彼の地に知れわたっていたらしい。⁽⁴²⁾その
榮西の高弟である明全らの入宋は、はじめより天童山の人々
にとって興味の的といってよかったのではなからうか。もち
ろん、かつて榮西の尽力によって面目を一新した千仏閣など
の伽藍を、この目で確かめたい衝動も明全には存したことで
あろう。

ところで道元禪師は『戒牒奥書』にて、ことさらに、

已入_レ唐、投_三天童山_一入_三了然寮_二。于_レ時堂頭無際_了派禪師住持
也。首座智明、都寺師広。

と記しており、明全が天童山の了然寮という寮舎に居住する
こととなり、その掛搭した時の住持である臨濟宗大慧派の無
際_了派の名のほかに、当時、首座であった智明と都寺であつ
た師広の名がことさらに記されている。『続日域洞上諸祖伝』
でもこれを受けて、

次抵_三天童山_一、謁_二無際派禪師_一、留_三錫於席下_二。会裏上首智明首
座・師広都寺等、皆称_二莫逆_一也。

と記し、明全が了派の席下に学び、智明や師広らと莫逆の交
わりを結んだとすら伝えているが、この点は定かでない。了
派は大慧宗杲の高弟である拙庵徳光^(一一二一—一一〇三)(仏照禪師)の嗣法門人の
一人であり、日本達磨宗の大日房能忍(深法禪師)とは同門と
いうことになる。⁽⁴³⁾また、時の首座である智明とは、あるいは
了派と同門の浙翁如琰の法嗣で、紹定二年に温州(浙江省)樂

清阜東の北雁蕩山の羅漢寺に開堂出世した介石智朋のことを
指すのかも知れない。⁽⁴⁴⁾

明全や道元禪師らはおそらく僧堂内での坐禅辦道は大衆に
一如したはずであるが、その居住の寮舎は了然寮であつたと
される。この了然寮という寮舎は、後に明全が示寂した建物
であることから涅槃堂のごとくに思われやすいが、涅槃堂と
はまったく別個の寮舎である。『大宋名藍図』(一般には『五山
十刹図』とも)によれば、了然寮は景德寺山内の南西側の宣明
(浴室)の後方に記されており、涅槃堂は南東側の東司の横に
記されている。了然寮の付近には老宿寮や前寮寮などがある
ことから、明全や道元禪師らがある程度、榮西ゆかりの日本
僧として優遇されていたらしいことが察せられる。⁽⁴⁵⁾

ちなみに『典座教訓』には、嘉定一六年五月になされた慶
元府港の舶裏での阿育王山広利禪寺の老典座との問答につづ
いて、

同年七月間、山僧掛_三錫天童_二時、彼典座来得_二相見_一。云、解_レ夏
了退_二典座_一、歸_レ郷去。適聞_二兄弟説_三老子在箇裏_一、如何不_二来相
見_一。山僧喜踊感激接_レ他。説話之次、説_レ来前日在_二船裏_一文字辦
道之因縁_上。典座云、学_二文字_一者、為_レ知_二文字之故_一也、務_二辦道_一
者、要_レ肯_二辦道_一故也。山僧問_レ他、如何是文字。座云、一三三
四五。又問、如何是辦道。座云、徧界不_二曾感_一。其余説話、雖_レ
有多般、今所_レ不_レ録也。山僧敢知_二文字_一了_二辦道_一、乃彼典座大
恩也。向來一段事、説_二似先師全公_一、公甚隨喜而已。

という記録がみられる。⁽⁴⁶⁾この年七月に道元禪師が天童山に掛搭している時、かつての老典座が解制に職を退いて帰郷する途中、天童山に道元禪師を訪ねており、文字と辨道のことを語り合っているが、この一段の問答を明全に示すと、明全は随喜するのみであったという。道元禪師の一步一步の進歩を暖かく見守る明全の心情が察せられる。

また明全や道元禪師らが掛搭した当時、天童山にはすでに隆禅という名の日本僧が居住していたことが知られている。

『正法眼蔵』『嗣書』によれば、隆禅は嘉定年間の初めに入宋した人らしく、道元禪師の掛搭もない嘉定一六年秋に伝蔵主の嗣書を拝見する際の便をとったことで知られる。⁽⁴⁷⁾この隆禅は後に退耕行勇の後席を継いで高野山の金剛三昧院に住した仏眼房隆禅に比定される。先の『開山行状并足利靈符』の「開山勇禪師行状」には、

蓋師印証者若干、了心・全玄・隆禅、為之先鋒。

⁽⁴⁸⁾

とあり、隆禅は明確に大歇了心や妙寂全玄らとともに行勇の法嗣に名が挙げられている。あるいはその入宋は同門の了心と同時であり、了心が建保三年^(二二五)に帰国した後も天童山に留まっていたのかも知れない。⁽⁴⁸⁾とすれば、隆禅は明全や道元禪師とも同じ栄西門流ということになり、はじめから因縁浅からぬ仲であったことになろう。

栄西の年忌

ところで明全が入宋した目的の一つとして、先師栄西の年回法要をゆかりの天童山にて厳修するということがあったらしい。そのことを伝えるのが『千光法師祠堂記』の存在にはかならない。すなわち『千光法師祠堂記』およびこれを受ける僧伝・燈史には、

祠堂：後十年、其徒明全、復来山中、捐楮券千緡、寄諸庫、
 転息為七月五日忌、設冥飯。衆本孝也。

延宝：登天童山、拜明菴先師祠堂。值其忌日、捐楮券千緡、
 設大会齋。

本朝：登天童山、拜先師明菴祠堂。值其忌日、捐楮券千緡、
 設大会齋、供山中衆。

という記事が存している。『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』は明確に『千光法師祠堂記』を継承していることがわかる。これらによれば、明全は栄西が示寂して後一〇年して天童山に至り、楮券千緡を諸寮舎に寄進して七月五日の栄西忌に冥飯の大会齋を設け、山中の大衆に供養したとされる。

楮券（紙幣のこと）千緡にも及ぶ喜捨というから、かなりの財施を天童山に施したことが知られるのであり、明全の入宋には大きな財源が必要であったことが改めて窺われる。それはまさに建仁寺・寿福寺など栄西ゆかりの寺々の代表とし

て、榮西門流あげての中国派遣でなかったならば成し得ないものであり、明全らの入宋が榮西の法乳の恩に酬いるためのものであった感を如実に伝えるものといえるだろう。

しかも注目すべきは、このときにはすでに日本国千光法師祠堂というものが天童山内に建立されていたことが知られるのであり、明全らもこれを拜登すべく天童山に到っている点である。おそらくはこの祠堂はかつて榮西が天童山の千仏閣の重修に際して遠く日本より巨木を寄与し、その功を助化した勝縁を記念すべく建てられた天童山側の配慮の産物であったものと見られる。⁽⁴⁹⁾

『千光法師祠堂記』とは実にこのとき祠堂にてなされた榮西に対する供養を記念して著されたものにほかならない。おそらくこの法要がなされる時点には、明全はすでに修職郎監臨安府都税務の虞樗という官僚にこの『千光法師祠堂記』の撰述を依頼していたものと見られる。

ただ、問題なのは明全の入宋は嘉定一六年であるが、榮西の一〇周忌とすれば嘉定一七年に当たっていることであろう。したがって、明全がそのいずれの七月五日に榮西の供養をなしたのかは一概に断定できないことになる。いまは無際了派の示寂が嘉定一七年の春か夏であったということからして、この年とみるのには問題があり、一〇年とはあくまで概算であって、入宋直後の嘉定一六年に供養の法会がなされた

とみるのが自然であろう。こうした状況を踏まえれば、明全が明融の遷化まもないのをあえて承知の上で入宋渡航を決行した理由の一面も領けよう。

道元禪師の諸山歴遊

ところで道元禪師はその後、明全とは別れて諸山歴遊に赴いている。道元禪師の諸山歴遊が何時のことであったのかに關しては諸説が存しており、⁽⁵⁰⁾いまだ決定されていない感があるが、この間の明全は道元禪師と行動を共にすることはなかったらしい。あるいはすでにこの頃より明全はかなり体調を崩していたのかも知れず、天童山の了然寮に留まっていたのであろう。

道元禪師ははじめ杭州(浙江省)余杭県西北五〇里の徑山興聖万寿禪寺に赴いて、住持で臨濟宗大慧派の浙翁如琰^(二五—二二五)に参じており、一旦は天童山に帰山しているが、その後、再び諸山歴遊の旅を果たしている。このときの歴遊の地は南方の台州(浙江省)の天台山や温州(浙江省)の北雁蕩山を中心とするものであった。⁽⁵¹⁾とりわけ天台山の万年報恩光孝禪寺はかつて榮西が虚庵懷敏と契当した因縁の故地である。⁽⁵²⁾万年寺への来訪はそんな榮西への報恩にも貫かれていたのではなからうか。ともに赴くことのできない明全にとっては悔いの残るものであったはずであり、道元禪師としても明全の代行として

きわめて意義深い行動であったといえる。

ところで『正法眼蔵』『嗣書』によれば、時の万年寺の住持であった元奩という人は、前住宗鑑の後席を継いで万年寺の叢席を一興した人とされるが、ここにいう宗鑑とは臨済宗黄龍派の心聞曇贄の法嗣で潭州（湖南省）寧郷県の大滄山密印禅寺に住したことが知られる映庵宗鑑のことを指すものとみられる。⁵⁴とすれば、その宗鑑の法嗣ともみられる元奩もまた宋西とは系統的にきわめて近い人であったことになろう。おそらくは万年寺にても宋西に対する報恩供養が挙行されたものと推測される。

疾に冒されつつあったとみられる明全にとっても、入宋の大きな目的の一つに天童山とともに万年寺にても先師宋西のあとかたを偲び、かつ報恩の供養を厳修したかったに違いない。この点、道元禅師の諸山歴遊を遠く天童山にて見守る以外になかった明全の心情を察するとき、その立場が一層つらく伝わってくる思いがある。天童山に帰山後の道元禅師により明全はそんな宋西ゆかりの地の現状の一部始終を伝え聞いたことであろう。

了然寮での示寂

その後、明全の名は天童山をはじめとして両浙（東浙と西浙、浙江省の全域を指す）の諸山に知られたらしい。ときに天

童山では無際了派の後席を継いで嘉定一七年の夏か秋の初めには曹洞宗真歇派の長翁如浄が第三一代の住持として勅住している。⁵⁵道元禅師がいつの時点から如浄に学んだのかは断定しがたいが、その後、宝慶元年五月一日には如浄の席下で身心脱落を前提とした面授がなされている。如浄を真に正師と仰いで隨身することになった道元禅師の姿を明全は如何に見ていたのであろうか。道元禅師は『宝慶記』の冒頭にて、

後入千光禅師之室、初聞臨済之宗風。今随全法師而入炎宋。

と記して如浄に呈している。この時点では明全もいまだ健在であった。仏法のために入宋した二人であれば、明全にとっても道元禅師の成長は喜ばしいことではなかったか。『続日域洞上諸祖伝』には、

未幾、派搥退鼓、会如浄禅師、詔視象。師不移錫、留而親近焉。

とあり、了派の示寂後、如浄が天童山の住持として入院するや、明全も引き続き天童山に留まり、如浄に親近したとされる。明全が他山に赴いた形跡がないことから、一応、この記事は史実と見てよいであろう。明全が如浄に親しみ参学する期間の可能性も一〇ヶ月ほどであった計算になろう。

しかし、そんな矢先に明全は急な疾で遷化するのであり、明全の遷化に至る過程を道元禅師は『舍利相伝記』にて、

しかるに、道たかく徳つもるほど、名やうやく両浙にながれ、ほまれひそかに九州におよぼむとるとき、大宋国宝慶元年五月十八日、たちまちに微疾をうけ、おなじき廿七日たつとき、衣裳をたたくし、身体をまさしくして、端坐して寂にいらる。ここに寺門くものごとくあつまりて礼拝し、人家かすみのごとくきたりて稽首す。

と鮮明な筆致で伝えている。当時、明全の道徳はしだいに高まり、その名声も両浙の地に知れわたるようになっていたらしい。まさに明全は榮西の高弟として南宋の地にその最後を飾ったわけである。

ところが明全は宝慶元年五月一八日にたちまちに微疾を受け、わずかに一〇日を経て同月二七日の辰の時に示寂している。明全は発病してからきわめて短期にして示寂していることから、何か特別な急病に冒されたものであろう。もともと明全は在宋中、ほとんど天童山を離れることはなかったらしいから、あるいはそれ以前からかなり体調を崩していたのかも知れない。

ところで自らの遷化まもないことを察知した明全が、愛弟子の道元禪師に榮西下の記文を授与したという伝承が存している。すなわち、瑩山禪師が正和四年八月七日に永平寺四代義演の遺物として拝写したとされる「榮西僧正記文」という古文書がいまに伝えられている。⁽⁵⁶⁾いま、これを示すならば、

榮西、求法為懷、欲征西乾。生年二十八歲、渡海入唐。彼国仏法特盛、王公相將皆歸仏道。見此風規、隨喜銘肝。其年秋間歸国。後再入宋、參善知識、聊伝臨濟之宗風、兼善五家之公案。駐錫太白、始終五年。于時虚庵懷敏禪師、為当寺之堂頭、礼為伝法之宗師、是乃例也。遂歸日本、建三箇寺院、潜弘通於祖師之道。然而未広博之伝授、所以時節未到也。時節若到、大法自然行焉。榮西、建三箇寺、建仁寺・聖福寺・寿福寺、專志禪宗。但鐘撞未遇、所以不遠響而已。此三所寺院、顯密交変、荒廢代謝者、暫候時也。雖然是、始終應歸禪宗一門。是則榮西多生之願念也。

榮西在之世間、結縁之道俗、助成此道、弘伝吾朝。彼時、国王大臣、歸信此宗、興隆此宗。其時、明心悟道之人、充満於朝野。榮西門人、以清淨梵行為業、以三衣一鉢為所持、永抛名利之輩、當為伝授大道之祖。違之、非吾弟子。或依應真之示、或得上天之告、記之。

于時建保二年甲戌正月二日 西録、与門人明全 在判
大宋宝慶元年己酉五月廿四日 明全伝道元 在判

というものである。内容は一般に榮西の「未来記」と呼ばれるものであり、五〇年後には禪宗が日本に盛んとなることを予言している。この記述によれば、この記は建保二年正月二日に榮西が自ら録して門人の明全に与えたものであり、それを宝慶元年五月二四日に明全が道元禪師に授与したとされる

のである。それはまさに明全が亡くなる数日前に相当しているわけである。その真偽のほどはいま一つ定かでないが、あるいはこの明全最後の記文を受けたればこそ、道元禅師はその後血脈には青原下の祖師のみを限定して記することはせず、南嶽下の法統をも併記したのではなからうか。⁽⁵⁷⁾

ちなみにこの明全示寂の状況を諸伝も、

戒牒…全公在天童經三年、四十二歲五月廿七日辰時、円寂

于了然。于時大宋宝慶元年乙酉載也。于時堂頭和尚如

浄禅師。

祠堂…入山三年、示寂於了然齋。

延宝…居三年、化于了然齋。

本朝…居三年、化於了然齋。

諸祖…宝慶元年乙酉、罹疾不起。五月二十七日、寂于本山

了然寮。享年四十二歲。（中略）即本朝嘉祿元年也。

とそれぞれ伝えている。これらによれば、明全は五月二十七日に世寿四二歳の生涯を了然寮にて終えたことがわかる。とりわけ『舍利相伝記』においては、明全は衣裳を正して身体を整え、端坐したまま遷化したとされる。そして、明全の遷化を聞いて天童一山の大家は雲のごとく集まって礼拝し、近隣の人家の人々も霞のごとくやって来てその遺体に稽首したとされる。それはまさに両浙の人々に慕われた明全の徳望を遺憾なく今日に伝えるものであろう。

また『戒牒奥書』ではときの堂頭和尚であった如浄の名がことさらに記されていることから、おそらく堂頭の如浄が明全の葬儀の導師を務めたものと解せられる。それがまた身心脱落と面授を経て門人となった道元禅師の、それまでの本師であった明全に対する如浄の礼でもあったとみたい。まさに明全は道元禅師を如浄に預け、自らの使命を果たし終えて世を去ったわけである。

舍利と建塔

ところで明全の荼毘の際には多くの舍利が得られたことが『舍利相伝記』をはじめとする諸伝によって伝えられている。すなわち諸伝には、

舍利…供養の儀式をはりて、おなじき廿九日たつとき、闍維するに、火のいろ五色にかはる。衆これをあやしみていはく、かならず舍利現すべし。ことばのごとく闍維のところをみるに、白色の舍利三顆をえたり。これを寺につぐるに、寺の大家みなこぞりてうやまひたとび、供養し供敬す。そののち連及してひろふに、あつめて三百陸拾余顆をえたり。ここに大宋国のうち、いづれのところも、みなこれをきき、うやまはずといふ事なし。遠近親疎みなことごとくほめほむ。つるに寺に碑をたてて、のちにつたゑんとしき。

祠堂…火後得堅固子無數。付道元藏歸故国、併刻于祠。

大宋宝慶元年八月九日。修職郎監臨安府都稅務虞樗記并書。陳祥刊。

延宝…火浴流舍利無算。元公齋歸本國。

本朝…火浴流舍利無算。元公齋囊歸於本邦。

諸祖…火浴得堅固子無算。

とあり、とりわけ『舍利相伝記』にはその間の事情がきわめて克明に記されている。すなわち五月二十九日の辰の時に明全の遺体は闍維茶毘に付されたとされるが、その際にその炎は五色に変わったため、人々は舍利が現るのではないかと怪しんだという。そのことばのごとく、はじめに白色の舍利三顆が得られたために、さらに天童一山の大衆がこぞって供養恭敬して灰の中を拾うと、実に三六〇余顆もの舍利が得られたというのである。その奇瑞は人々の噂となり、ついに寺の千光法師祠堂内に明全の碑が建てられて、その遺徳が刻まれたという。⁽⁵⁸⁾

この点は『千光法師祠堂記』においても、また僧伝・燈史においても「火浴して舍利を流すこと算うる無し」と伝えている。このように、明全の茶毘の際に堅固な舍利が無数に得られたとされるのであるが、その史実のほどは定かでないものの、何らかの奇瑞があったことはまちがいなさう。そのため道元禪師はこれを秘蔵して帰国することになり、また

あわせて天童山の千光法師の祠堂に明全の記事を刻ましめていた。その文は修職郎監臨安府都稅務の虞樗という人によって記し書され、陳祥という工匠によって刊刻されたわけであり、その年月日は宝慶元年八月九日であったと伝えられる。明全の示寂後わずかに二ヶ月余のことであり、榮西の千光法師祠堂の記事を含めて、この事業は明全を失った直後に道元禪師がその意志を継いで行なったものである。

この明全茶毘の際の舍利出現が如何に特異なできごとであったかは、道元禪師が『舍利相伝記』にて、

おほよそ我この日本国は、仏法まさしくつたはれてのち、六百歳にならむとす。しかれども、まさしくその闍維のち舍利をとどむる事は、いまだむかしにもきかざるところ也。

と特記していることにより確かめられる。舍利信仰は阿育王山広利寺とも関わっており、興味深い事跡といえよう。明全の名はこの舎利の出現で広く彼の地の人々に知られたらしい。ちなみに『永平室中間書』（『御遺言記録』とも）にも、

仏樹房者、我国坊号也、宋朝知此名。

という表現が存しており、明全の房号である仏樹房の名が宋朝にもかなり知られていたと記している。ちなみに道元禪師が明全示寂後とみられる宝慶元年の夏安居に結制中の則を破ってまで仏舍利信仰の霊場である阿育王山広利寺に赴き、住持で臨濟宗虎丘派の晦巖大光に参じているのも、先の明全の

舎利出現と関わる行動であったのではなからうか。⁽⁵⁹⁾

また『戒牒奥書』自体もおそらくは明全の示寂後まもない時期に、道元禅師が備忘のために亡き明全の比丘戒牒にその履歴を随意に記したものであるらしい。それがそのまま道元禅師の北越入山とともに後に永平寺の室中に秘蔵されて現今に残されたわけである。

ちなみに『道元和尚広録』巻一〇「偈頌」には、

看_ニ然子終焉語_一（二首）

廓然無聖硬如_レ鉄、試点_ニ紅爐_一銷似_レ雪。更問今帰_ニ何処_一去、碧波深処看_ニ何月_一。

礫_ニ破從來一版鉄_一、莫_レ知_ニ落処_一六華雪。天辺玉兔落_ニ潭底_一、指折如何未_レ見_レ月。

という二首の偈頌が伝えられている。これは明全や道元禅師らとともに入宋した廓然という人が、やはり彼の地で遷化した際に、道元禅師が廓然の終焉の語すなわち遺偈を看て、これに和して詠んだものではないかとされている。⁽⁶⁰⁾ 師の明全のみならず同門の道友廓然もまた中国浙江の地にその身を終えていることになろう。その時期は定かでないが、道元禅師は廓然の臨終を目の当たりにすることはなく、後にその遺偈を看たわけであるから、諸山歴遊の時あたりのことかも知れない。

くわえて時あたかも明全示寂と同じ日本の嘉祿元年の一二^(二二五)

月一八日には、明全外護の檀越であった佐竹秀義もまた明全を追うかのごとく、はるか鎌倉名越の庄にて七五歳の生涯を終えている。秀義の遺体はただちに常陸に運ばれ、同月二四日に実相山正法院の新廟に葬られており、その法号は正法院秀山蓮実大禅定門と伝えられる。⁽⁶¹⁾ 葬儀の導師はおそらく明全の弟子で正法院の第二世となった人物が務めたのであろう。

ところで鎌倉の稻荷山浄妙寺所蔵の『開山行状并足利靈符』「行勇禅師年考」の嘉祿二年の項には、

同三月、明全寂_ニ于宋地_一。師聞_ニ訃音_一嘆云、可惜許、失_ニ祖家一_一隻_一。云々。

という興味深い記述が見い出される。これは嘉祿二年三月に明全が宋地で示寂したことをいうのではなく、このときに明全の訃音が鎌倉浄妙寺の退耕行勇の下に届けられたことを伝えるものであり、その面ではこれまで知られなかった貴重な史料といえる。明全の訃報を伝え聞いた行勇は「可惜許、祖家の一隻を失えり」とその示寂を惜しみ嘆いたことを伝えている。可惜許とは惜しみ嘆く感嘆の語である。従来、行勇と明全は同じ栄西門下ではあっても、具体的に如何なる交流が存したかは定かでなかった。しかし、この記事によって、両者の関係が存外に親密であったことが知られたのであり、明全が改めて栄西門下の一角として、大きな期待をかけられて入宋していた事実が偲ばれる。

ところで、この明全の訃報を行勇に伝えた人物に関しては定かでないが、あるいは在宋中の明全や道元禪師とも関わりを持ち、帰国後、行勇の後席を継いで高野山の金剛三昧院に住した隆禪に比せられるかも知れない。⁽⁶²⁾隆禪の帰国がいつのことであったのかは明確ではないが、道元禪師よりは早くに帰国の途に着いているらしく、行勇との関わりからいっても十分に可能な説ではなからうか。

道元禪師の帰国

明全を失った後の道元禪師は、如浄を本師として正伝の仏法を究め、如浄の嗣法の門人として宝慶三年秋七月に帰国の途に着いている。道元禪師の帰国後、如浄も七月一七日には六六歳の生涯を終えている。道元禪師にとっては在宋中に学んだ天童山の無際了派と径山の浙翁如琰さらに天童山の如浄のみならず、明全や廓然などともに入宋した人、そんな道元禪師と関わり、また道元禪師を育てた多くの人々が相継いで世を終えていることになる。それはあたかも道元禪師ひとり⁽⁶³⁾を育てるためにその役割を演じきった人々の最期であったともいえよう。

道元禪師は明全の遺骨および舍利を胸に八月には日本に帰国している。⁽⁶³⁾おそらく道元禪師は明全の遺骨を懐いて万感の思いをもって日本の土を踏んでいるはずである。如浄の示寂

まもないのを察しての帰国であっただけに、明全・如浄への報恩と新たな仏法挙揚の使命が複雑に交錯していたことであろう。肥後(熊本県)河尻に帰着した道元禪師は、まもなく九州の地より京都に赴き、建仁寺に落ち着いているが、⁽⁶⁴⁾そんな中で明全のために『舍利相伝記』を撰している。『舍利相伝記』の末尾には、

ここに洛陽の智姉は、すなはち先師剃度のそのひとつ也。恋慕
ころろふかし。渴仰それゆるからむや。ねんごろに一身を請
ず。つゐにもて処分す。そのころは、ただ今生値遇の縁あさ
からざる事をしたふのみにあらず、当来化導のまことかならず
たがはざるべしとなり。いささか年月を記して、のちにしらし
めんとす。

ときに嘉禄三年十月五日

門人道元
(印)記

とあり、明全の剃度の弟子で洛陽の智姉という人が、道元禪師にその撰述を依頼したために、建仁寺に落ち着いて時を経ずして嘉禄三年一〇月五日の達磨忌には『舍利相伝記』を撰しているわけである。

ところで、明全が天童山にて客死した訃報は、当然、明全ゆかりの武蔵の満願寺や常陸の正法院にも知らされたはずである。これら二ヶ寺の使者が京都に至り、帰国後の道元禪師と何らかの接触を持ったとしても不自然ではない。とりわけ正法院の外護者である佐竹氏は、その後も明全から道元禪師

へとつづく一系を重んじていたらしい。

後に第六代当主となった佐竹次郎長義が道元禪師門下の永興詮慧を招いて文永四年に松沢村すなわち現在の那珂郡美和村松沢に秘沢山陽雲寺を開創したことが知られる。長義は詮慧を洛陽の地より迎えて一寺を建立し、祖母で佐竹雅楽助義宗の娘である陽雲寺殿春山蓮芳大姉の冥福を祈ったとされるのである。長義の祖父は正法院に葬られた佐竹秀義であり、その法名は正法院殿秀山蓮実大禪定門とされる。長義としては明全や道元禪師を意識して詮慧を招いていることはまちがいない。⁽⁶⁵⁾

このようにみるならば、帰国後の道元禪師も明全に代って佐竹氏と何らかの繋がりが存したとみることも可能である。この点はなお史料の不足で何ともいえないが、『三大尊行状記』や古写本『建搦記』などによれば、後に道元禪師が深草興聖寺を去るに当たって、遠国や畿内の檀越で伽藍を寄進しようとする者が一二人にも及んだとされるが、その一人にあるいは佐竹氏の名が存していたのかも知れない。いまはその可能性を指摘するにとどめたい。

道元禪師の明全尊崇

『道元和尚広録』には明全に対する二度の忌辰上堂が残されている。師翁である栄西に対しては巻六に「明庵千光禪師

前権僧正法印大和尚位忌辰上堂」が、また巻七に「千光禪師前僧正法印大和尚位忌辰上堂」がそれぞれ残されており、「師翁」あるいは「師翁千光法師」と尊称している。一方、明全についても巻六に、

仏樹和尚忌上堂。夫欲開演正法眼藏、有第一義門、有第二義門。拈拏・豎拳・頂顛・眼睛・鼻孔・脚跟。擲下拄杖於階下云、乃這箇等第二義門施設也。且道、此外作麼生是第一義門。山僧今日開演仏祖第一義門。所生功德、回向先師大和尚。遂拳云、迦葉尊者問阿難尊者、何等一偈出生三十七品及一切仏法。阿難曰、諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸仏教。迦葉然之。大衆要委悉這箇道理麼。良久曰、仏祖甚深最妙旨、猶如今夢無先覺。弟兄仏口所生子、一偈單伝是本孝。という上堂が存し、さらに巻七にも、

仏樹先師忌辰陞堂。挙、古仏曰、身從無相中受生、猶如幻出諸形像、幻人身識本來無、罪福皆空無所住。師曰、受生且致、作麼生は無相底道理。還要聽麼。是法住法位、世間相常住。這箇是唯仏与仏乃能究尽底道理。今日知恩報恩底一句作麼生。良久曰、如来未越明因果、菩薩必生兜率天。

という上堂が残されている。いづれも明全を「仏樹先師」または「先師大和尚」と尊称しているものであり、はじめの上堂では仏祖の第一義門を開演するに際して先師明全に回向しており、摩訶迦葉と阿難陀の師資になぞらえて七仏通誠偈が示されている。戒律に精通した明全の生きざまを偲んでのこと

であろう。またつぎの上堂でも明全への知恩報恩の一句として「菩薩は必ず兜率天に生ず」と語っている。道元禪師が如何に亡き明全の影響を強く受けたかが知られよう。

また『道元和尚広録』巻一〇「真贊」には、

仏樹和尚

平生行道徹通親、寂滅以来面目新。且道如何今日事、金剛焰後露_ニ真身_一。

という明全に対する仏祖贊も伝えられている。道元禪師が『道元和尚広録』にて真贊を残しているのは、わずかに「釈迦出山相」が二首、「達磨」と「阿難」がそれぞれ一首、それにこの「仏樹和尚」の一首にすぎない。栄西や如浄に対する仏祖贊が存していないだけに、明全への私淑がより印象的になっている。道元禪師は明全が平生、仏法と親密一枚となつた徹底した行道を貫いたさまを贊してやまない。明全の面目はまさに道元禪師の仏法の中に連綿と受け継がれていったわけである。

ちなみにこの真贊に関して、古写本『建搯記』には、

至今、永平寺ニ建仁開山并二代和尚ノ御影在_レ之。二代ノ御影ニハ道元和尚贊ヲ有テ、自筆ニアソバシ置_レタリ。其贊云、平生行道徹通親、寂滅以来面目新、且道如何今日事、金剛焰後露_ニ真身_一、小師道元拝贊、トアリ。建仁寺二代ノ御名ハ明全、又ハ仏樹トモ申、又ハ行勇トモ申也。永平集ノ中ノ法語ニ、仏樹先

仏樹房明全伝の考察（佐藤）

師忌辰陞座アリ。是ヲ以テ思ニ、紛レサルナリ。仏樹ハ道元ノ師匠ニテ在ス。（瑞長本）

という記述が存する。これは後の永平寺において建仁寺開山の栄西と二代の明全の御影が存し、とくに明全の御影には先の道元禪師の贊があり、「小師道元拝贊」の語が付されていたというものである。⁽⁶⁸⁾真贊とは一般に依頼者が頂相を描いて贊語を求めるものであるから、道元禪師にこれを依頼する人があつたかのごとくにも見られる。しかし、これが栄西の頂相とともに永平寺に大切に保存されていたという記事からすれば、道元禪師にとって明全の存在は他に代えがたいものであつたがために、自ら後世に伝えるべく贊を付して寺内に残したものと一方が相応しいかも知れない。道元禪師が如何に生涯にわたり明全を先師として尊崇していたかをものがたる内容といえる。

ただ、道元禪師の著述を通して、明全から具体的に受けた説示の内容は何ら記されていない。同じく先師の語を用いながら、如浄の説示が頻繁に『正法眼蔵』などに扱われているのに比すると、それは対照的でさえある。明全は道元禪師の禅思想の形成に如浄ほど決定的な影響を与え得なかつたのかも知れない。道元禪師が明全から直に受けたものは、おそらく戒律を順守する徹底した清僧のすがたではなかつたであろうか。

明全の門人

すでにみたごとく『正法眼蔵隨聞記』巻六には「時二先師、弟子及同朋等ヲアツメテ商議シテ云」という表現があり、『伝光録』『永平辨和尚』にも「仏樹和尚ノ門人数輩アリシカドモ、元師ヒトリ參徹ス」と記されていることから、明全には嗣法門人ともいうべき人が数輩はおり、そのほか榮西寂後に明全を師と仰ぐ弟子や同朋がかなり存したことが知られる。では、具体的に明全には道元禅師のほかに如何なる門人が存したのか。以下、考察してみることにしたい。

道元禅師のほかに、明全とともに入宋の途に着いたとされる門人に廓然と高照の二人の名が伝えられている。この中で廓然に関しては、一に『道正庵系図』の末に「入宋以前号ニ廓然、帰朝以後曰道正」とあること⁽⁶⁹⁾から、木下家の元祖木下隆英（道正）のことではないかという説もあるが、この系図そのものが江戸時代の撰述であり、廓然をそのまま道正とするのは問題である。とりわけ廓然の方はすでにみたように、明全の後を追うかのごとく宋土に化したらしいことが知られているから、道正とは別人とみるべきであろう。一方、高照に関しては一に亮照とする史料もあるが、その後、道元禅師とともに帰国しているのか否かすらも定かでない。いずれにせよ、廓然と高照の二人は後高倉院の院宣などに記され

る順番からして、明全の弟子であり、道元禅師にとっては同輩かまたは若干の後輩であったものとみられる。⁽⁷⁰⁾

つぎに武蔵の唄樹山満願寺の關係で法道玄量と南岳智栄の二人の名が知られる。玄量に関しては陽雲寺（もとの満願寺）の寺史である『崇栄山誌』の「当寺再興臨濟開山同歴」に、

二世法道玄量大和尚へ明全和尚法嗣。建保三年入山。寛元四年四月二十一日示寂

と記されている。玄量は明確に明全の法を嗣いだ門人であったとされており、その唄樹山満願寺への入寺は建保三年であったという。この年は榮西が示寂した年であり、明全の建仁寺僧団での立場がその重要度を増していく時期に相当している。あるいはこの時期の明全が建仁寺に止住すべく自らの代りに玄量を満願寺二世住持に据えたのかも知れない。とすれば、道元禅師が建仁寺にて明全に学ぶ以前には、玄量は明全の席下を離れていたことになり、道元禅師とは時期を別にした門人であったということになる。⁽⁷¹⁾

ただ、同門の南岳智栄の入寺が安貞元年であることから、このときにはすでに玄量は満願寺住持の席を智栄に譲っていることになり、玄量の住職期間は一三年間ということになる。もっとも玄量の示寂は寛元四年四月二二日であったとされるから、その後の動静は定かでないことになる。活動期間などからして、明全門下でも初期の高弟であったものと見ら

れ、道元禪師にとっては法兄に当たる人といえるだろう。

また満願寺の三世となった南岳智栄に関して、やはり「当寺再興臨濟開山同歴」に、

三世南岳智栄大和尚へ明全和尚法嗣。安貞元年入山。曆仁元年三月二十五日示寂

と記されている。この人もやはり玄量とともに明全の法を嗣いだ門人であったというのであり、玄量の後席を継いで安貞元年に満願寺に入寺している。しかしながら、智栄は玄量に先立って曆仁元年三月二十五日に示寂したことが知られるから、その住持期間はわずか一二年に過ぎなかったことになっている。活動期間などからして、智栄はかなり若くして示寂しているらしく、やはり玄量とともに明全門下でも初期の高弟の一人で、道元禪師にとっても法兄に当たる人であったものと見られる。玄量と智栄の二人が道元禪師と如何に関わっていたかは何ら判然としないが、智栄の場合は道元禪師と修行期間を同じく明全に学んでいた可能性も存する。⁽⁷¹⁾

つぎに智姉であるが、この人は帰国直後の嘉禄三年一〇月^(二三七)

五日に道元禪師に明全の『舍利相伝記』を依頼した人物である。「洛陽の智姉」とあるから、京都の人であり、明全が剃度した門人のひとりであったという。おそらく智姉は明全の帰国をひたすら待ち望んでいたのであろうが、道元禪師がその遺骨舍利を抱いて帰国したことにより明全への思いを一

層、新たにしたのではなからうか。このため道元禪師は智姉の情に感じて明全の遺骨舍利を智姉にも処分したとされる。

なお、この智姉に関しては、瑩山禪師の『洞谷記』に「彼平氏女者、永平和尚建仁寺御座時御弟子、明智優婆夷再来也」として、能登(石川県)永光寺の開創に尽力した平氏女にも対比される明智優婆夷のことであろうとされる。おそらくは明全の「明」を系字として受けているものとみられ、『洞谷記』にはまた「瑩山今生祖母明智優婆夷」とあることから、この明智優婆夷こそ瑩山禪師の祖母に当たる人物であったことにならう。すなわち明智優婆夷は明全に従って剃度した後、道元禪師の弟子として参学したわけであり、後には瑩山禪師の祖母として「瑩山今生祖母、明智優婆夷」(山僧遺跡寺寺置文記)と記されるがごとく、瑩山禪師を幼穉養育しており、曹洞宗の古史に隠れた重要なはたらきを演じた人であったことが知られる。⁽⁷²⁾

さらにいまひとり明全と関わりのある人物として理観という人の名が知られる。すなわち永平寺には文曆二年八月一日に理観という人に授けたとされる「三国正伝菩薩戒血脈」という戒脈の写しが伝えられている。これは南嶽下の菩薩戒と天台の円頓菩薩戒を併記して道元禪師が明全より伝えられたものである。その奥書には、

予昔幼受業於叡岳、長重誦於兩師。至老年一征斯那。投台

嶺敵禪師、重誦於菩薩戒。今以舍那七仏之三師脈、采西接而
与授明全。明全授道元、道元授理観畢。若非梵行人帯鉢
鉢者、莫授与一矣。

時文曆二年乙未八月十五日 道元示

というふう⁽⁷³⁾に記されている。この血脈には青原下の菩薩戒の
相承は記されていないことから、おそらく理観という人もか
つて明全剃度の弟子の一人であったものとみられ、帰国後の
道元禪師に引きつづき学んで、あくまでも天台と黄龍派の菩
薩戒脈を与えられたのであろう。ただし、理観に関してはそ
の後の状況が定かでない。

このようにみるならば、当時、明全縁故の人々で東山建仁
寺や比叡山横川などに居していた人が存した可能性も高いの
ではなからうか。また道元禪師を慕って興聖寺や永平寺に参
ずる人もあったわけであるし、武蔵の満願寺や常陸の正法院
という明全を開山・中興に仰ぐ寺院にも、明全の法嗣や門人
が分布していたわけであるから、明全ゆかりの僧俗は少なく
はなかったものと思われる。

おわりに

明全はおそらく建仁寺の将来を担う存在として入宋の途に
着いたはずである。しかし、遺憾ながら四二歳の生涯を天童
山の了然寮に終えている。もし、明全をして帰国せしめてい

たならば、采西門下の雄としてその後の建仁寺教団を統率す
る立場に就いたであろうことは想像するに難くない。当然、
采西門流の動向も変わっていたはずであり、寿福寺の行勇・
了心の師資とともに新たな中国禅への傾斜が明全によっても
計られたことであろう。その後、しばらく建仁寺教団に人な
しの感が存するだけに、明全を失った寿福寺の行勇の嘆き
は一段と実感をもって伝わってくるものがある。

しかし、反面では明全を失ったことで、道元禪師は真に如
浄を本師として仰ぐことができたとはいえる。明全が生きて
日本の土を踏んでいたならば、当然、道元禪師のその後の活
動も明全との師資関係による制約を受けざるを得なかったは
ずである。そんな意味でも明全は道元禪師を如浄に相見させ
ることでその使命を終えたわけである。

ところが明全を失うことで真に如浄を本師と仰いで帰国し
た道元禪師ではあったが、帰国して建仁寺教団に戻ってみる
と、一種特異な立場に置かれていたらしい。明全ゆかりの人
々は道元禪師に親しんだようであるが、他の采西門流からは
一歩も二歩も置いてみられていたのである。

こうして、道元禪師はまもなく建仁寺を出る覚悟を抱き、
ついには深草の興聖寺や越前の永平寺を開創することに連な
るのであるが、采西・明全への法乳の恩は道元禪師の生涯に
わたり持ち続けられている。また、その後の道元禪師の活動

にも榮西門流としての自覚がみられ、道元禪師の後半生は如浄とともに常に明全を背負い続けたものであったともいえる⁽⁷⁴⁾。明全はただ榮西に代って道元禪師を育成し、如浄に会わせるために生きた孤高の人物であった感を禁じ得ない。

註

(1) 従来の明全に関する研究としては、大久保道舟「明全和尚と高祖大師」(『第一義』二七―七)・同「道元と明全の師資関係」(『歴史地理』六九―五)、鏡島元隆「道元禪師と明全和尚」(『大法輪』昭和三八年二月号)などが存するにすぎず、いずれも道元禪師との関係に注目した論考である。もちろん大久保道舟『道元禪師伝の研究』や中世古祥道『道元禪師伝研究』さらに竹内道雄『道元』(人物叢書八八)などで、道元禪師と榮西の問題を扱った箇所にも、明全に触れる論考は多い。

(2) 『舍利相伝記』はもと伝道元禪師真蹟として加賀(石川県)前田家に秘蔵されていたものであり、後に金沢市下今町の松岡正信氏の所蔵となっていたが、現在は所在が不明である。幸いにその影写本が東京大学史料編纂所に伝存しており、唯一のものとなっている。また『明全和尚戒牒奥書』は仮の名称であり、明全の戒牒に道元禪師が付した真蹟の一つとして永平寺に所蔵されている。なお『舍利相伝記』と『明全和尚戒牒奥書』は大久保道舟編『道元禪師全集』巻下と『曹洞宗全書』「宗源下」に収録されており、また酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修『道元禪師全集』第七巻「法語歌頌等」に石川力山氏による両史料の原文・註・書き下しと解説がなされている。

(3) 『日本国千光法師祠堂記』は『統群書類従』第九輯上(巻二二

五)「伝部三十六」に存するが、松ヶ岡文庫所蔵で高峰東叟(一七四一―一七七九)が編した『千光祖師年譜』(または『日本禅宗始祖千光祖師略年譜』とも)の巻末に付されているものである。

(4) 『延宝伝燈録』巻六「末国天童山了然斎明全禪師」は『大日本仏教全書』六九巻(一八〇c)に、『本朝高僧伝』巻一九「京兆建仁寺沙門明全伝」は『大日本仏教全書』巻六三(一二二a)に、『続日域洞上諸祖伝』巻四「附録」の「明全和尚伝」は『大日本仏教全書』巻七〇(二六四b)に載るものをそれぞれ使用した。

(5) 『正法嫡伝獅子一吼集』巻下(曹全・室中・三二a)には貞応二年(一二二三)正月七日に明全が道元禪師に与えた師資相承語が載せられており、また『仏祖正伝大戒訣』巻上(曹全・禅戒・四a)には明全の事跡と榮西・明全・道元禪師における菩薩戒の相承を述べている。

(6) 退耕行勇の伝は中尾良信「退耕行勇の行実」(『曹洞宗研究員研究紀要』第一九号)に載る鎌倉稻荷山浄妙寺所蔵『開山行状并足利靈符』の「行勇禪師年考」と「開山勇禪師行状」に拠った。なお同氏にはまた「退耕行勇とその門流について」(『禅文化研究所紀要』第一六号)の論考も存する。さらに世良田長楽寺と釈円房榮朝については、尾崎喜左雄『上野国長楽寺の研究』(『尾崎先生著作集』第五巻)が存する。なお榮朝の生没年に関しては、『禅刹住持籍』(長楽寺・聖福寺・普門寺)の「上野州世良田山長楽寺歴代」に、

開山第一祖榮朝和尚、号_三釈円。嗣_三明菴西。承久三年辛巳、歳五十七、開_三長楽禅苑、住_三二十七年。宝治元年丁未九月二十六日戌時寂。塔_三于大光菴。寿八十三歳。とあるのに基づいて確定したものである。

(7) 榮西の伝は先の『日本国千光法師祠堂記』と同じく明の永楽二年(一四〇四)正月に杭州(浙江省)錢塘県の上竺講寺

前任(五一世)の古春如(加)蘭が述した『洛城東山建仁禅寺開山始祖明庵西公禅师塔銘』が基本となり、ほかに『吾妻鏡』巻二二と『元亨釈書』巻二などもより古い重要な史料を提供している。

(8) 建仁寺のことは『東山建仁禅寺歴代住持位次簿』や『東山建仁禅寺並諸塔頭略記』などが建仁寺両足院その他に伝存しているが、未見のため詳しい内容は定かでない。『扶桑五山記』四によれば、「山城州東山建仁禅寺へ土御門帝建仁二年壬戌、金吾將軍源頼家宮之。元久二年乙丑、上為官寺」と建仁寺の開創の概略を伝える。

(9) 円仁開創の天台宗時代の護国山満願寺に関しては、『崇栄山誌』の「当寺天台開山同歴住」に「当寺草創初祖円仁慈覚大師」として、

師者天台宗。崇神天皇第一皇子豊城入彦命節察東壤、其次御子留為郷人仁者、其胤ニシテ、下野国都賀郡人。姓壬生氏。延暦十三年二生。後出家シテ道德世ニ溢ル。弘仁十一年五月十五日、当寺を草創シテ護国山満願寺ト云。世住二十七代ニ至。仁寿四年四月、任比叡山延暦寺座主。爾来、当寺ヲ延暦寺末ニ改。貞観六年正月十四日、師七十一歳ニテ示寂。同八年七月、賜諡慈覚大師。

とあり、さらに二世の円覚(一八四六)より二七世の慈珍(一一二〇五)に至る歴住世代を挙げている。

(10) 『崇栄山誌』は崇栄護国山陽雲禅寺二三世の武田正樹がそれまでの陽雲寺の古記録をまとめて明治三五年八月に新調したものであり、寺の檀越や開山・歴住の事跡、さらに寺の歴史などをまとめたものである。編纂は新しいものの、そこにはかなり古い伝承を持つ記述も見い出され、注目すべき史料といえる。ただし、明全の記事に関しては、寺の伝承に『訂補建撕記図絵』などをもって補っている個所も多いことから、おそらく武田正樹が補足するまで寺伝としては、古く明全の

入山時期と示寂年時およびこれに関連する若干の内容などが知られる程度であったのかも知れない。

(11) 『崇栄山誌』「各大檀公開山歴住伝統譜」の「当寺天台開山同歴住」には、

廿七世慈珍僧都(元久二年五月二十日寂)とあるから、これによれば、慈珍は元久二年二月に明全に後席を譲って後、明全が四月一五日に開堂の式を挙げてまもなく、五月二〇日には示寂していることが知られる。

(12) 明全が満願寺と関わった頃の外護の檀那としては『崇栄山誌』「各大檀公開山歴住伝統譜」の「当寺大檀那」に、

大梁院殿勇嶽道威実阿大禅定門(木村城主。加治太郎左衛門尉丹治家季、丹党旗頭。正治元己未年五月七日逝。治承三年正月十五日、香花院卜定)

江月院殿慈光明照浄阿大禅定門(家季男。加治太郎左衛門尉丹治実家、始家実。承久三辛巳年八月十五日逝。建久元年十二月、上洛ニ先キ立、伽藍修繕)

謙中院殿惠覚円通大禅定門(安保二郎刑部丞孫。加治三左衛門尉丹治経員。文永五戊辰年三月十七日逝。正治二年十一月廿八日、香花院卜定)

という三人の名が伝えられており、時あたかも明全およびその門流の活動した時期に相当している。とくに加治実家(一一二二一)は建久元年(一一九〇)一二月に上洛に先立って伽藍を修繕したとされ、やはり『崇栄山誌』の「崇栄山陽雲寺記」にも、

治承三年正月十五日、加治太郎左衛門尉家季、永三拾貫文寺領附、香花院トス。建久二年二月、加治家実、伽藍ヲ修繕ス。元久二年、中興廿八代臨濟僧明全和尚住シ、延暦建仁両寺末ニ改。

と記され、伽藍修繕の年時が建久二年二月になっているものの、この人がその生存中に具体的に明全を臨濟宗開山として

拝請しているらしいことが判明する。

- (13) 夢窓派の古篆周印が編した『仏祖宗派図』の黄龍派の項にも、また桂芳全久の編した『正誤仏祖宗派之図』の「東山建仁禅寺」における栄西の門流の項にも明全の名が存せず、その存在すら明確にされていなかったらしい。従来、明全の名は道元禅師の残した著述その他によってのみ知られたらしい。中世古祥道『道元禅師伝研究』『建仁寺修学時代』の「明全とその思想」など参照。

- (14) 建仁寺六世の嚴琳については神子栄尊(一一九五—一二七二)の伝である『水上山万寿開山神子禅師行実』(『統群書類従』第九輯上(巻二二六)「伝部三十七」)に「師漸長、依同州柳坂山永勝寺僧都嚴琳ニ為レ師。琳即干光法師之高弟也。師之学ニ天台之教法ニとあるが、これは同じく『肥前国勅賜水上山興聖万寿禅寺開山勅賜神子禅師栄尊大和尚年譜』(同前)にも載る。また建仁寺七世の円琳には『菩薩戒義疏』が存し、その奥書によれば宝地房証真や我禅房俊苒に学んでいる。また道聖は博多聖福寺二世に、玄珍は同三世に住している。

- (15) 後高倉院が俊苒に受戒したことは、『泉涌寺不可棄法師伝』に後鳥羽院や順徳院の受菩薩戒につづいて「後高倉院、於ニ持明院、專ニ至ニ虔恭、受ニ菩薩戒ニ」(『統群書類従』第九輯上、五四a)とある。俊苒がこれらの菩薩戒を授けたのは建保六年(一一二八)とされる。なお明全が後高倉院に菩薩戒を授けたとされる承久三年には、俊苒は後鳥羽院と順徳院への落髮・授戒の戒師を勤めている。

- (16) 納富常天「俊苒と道元」によれば、俊苒と明全は栄西や後高倉院を接点として、何らかの関係にあったと推測する。

- (17) 長円寺本『正法眼蔵随聞記』巻五によれば、
我初メテマサニ無常ニヨリテ聊カ道心ヲ発シ、アマネク諸方ヲトブラヒ、終ニ山門ヲ辞シテ学道ヲ修セシニ、建仁寺

ニ寓セシニ、中間ニ正師ニアハズ、善友ナキニヨリテ、迷テ邪念ヲオコシキ。

- (18) 二寓セシニ、中間ニ正師ニアハズ、善友ナキニヨリテ、迷テ邪念ヲオコシキ。という表現があり、道元禅師が山門(比叡山)を辞して建仁寺に寓居することになった時、いまだ明全が建仁寺に至っていなかったためか、しばらくの間、正師・善友を得ずに、迷って邪念を起こしたことを伝えている。道元禅師が明全を知るのは建保五年であるから、それ以前には明全は建仁寺にいなかったことなるう。

- (19) 建仁寺第二代のことではかなりの混乱がみられ、中世古祥道『道元禅師伝研究』の「建仁寺修学時代」の「明全伝とその思想」でも、『建仁寺住持位次簿』や『扶桑五山記』などによって考察を加えている。

- (20) 道元禅師らの入宋を源実朝の入宋計画と結び付けた論考に杉尾玄有「源実朝の入宋計画と道元禅師」(『宗学研究』第一八号)が存する。また行勇を開山とし、隆禅を二祖とする高野山の金剛三昧院については、『高野山文書』第二巻に『金剛三昧院文書』が収められており、「金剛三昧院住持次第」「金剛三昧院紀年誌」「法燈国師行勇法系」などが伝えられる。詳しくは中尾良信「退耕行勇とその門流について」(『禅文化研究所紀要』第一六号)を参照。

- 『開山行状并足利靈符』の「行勇禅師年考」には「元暦元年甲辰、師二十二歳。過去牒云、春三月、奉朝公命、附慈月坊於周防法眼有俊、入宋究密頤。(中略)(文治)四年戊申師二十六歳。過去牒云、秋八月、師宋帰、直入鎌倉。朝公渥遇益厚」とあり、また「開山勇禅師行状」には「元暦元年春、奉源公命、入宋游歴、学質四律五論三大五部之秘蘊。文治四年秋八月帰朝、直入鎌倉、源公加遇矣」とある。これによれば、行勇は源頼朝の命で元暦元年(一一八四)に入宋し、文治四年(一一八八)に帰国している。ただし、その目的はあくまで教律の研鑽にあったらしい。

(21) 『延宝伝燈録』卷六「京兆建仁大猷了心禪師」(日仏全六九・一八〇c)には、

入_レ宋_レ徧叩_二禪林_一、帰首_三衆于_二龜谷_一、後住_三本山_一、遷_三京之建仁_一。(中略)本朝禪苑、雖_レ權_三輿于_二明菴_一、而衣服_三礼楽_二至_レ師備矣。

とあり、『本朝高僧伝』卷一九「相州寿福寺沙門朗誉伝」付録の「了心」伝(日仏全六三・一二三b)でもほぼ同様の記事を伝えている。

(22) この九年間の解釈については、入宋するまでとみる説もあるが、いまは妥当とみられる明全の示寂までの九ヶ年と解することにしたい。

(23) 台密の谷流に関しては、福田堯穎『天台学概論』の「第二卷天台密教概説」を参照。谷流は慈覚大師円仁の流れで十流を形成している。いまは榮西に就いて千光流の行法を受けたことを意味しよう。

(24) この点は松尾剛次『鎌倉新仏教の成立―入門儀礼と祖師神話―』(吉川弘文館〈中世史研究選書〉)の「東大寺戒壇での授戒制」に明全の偽戒牒についての詳しい考察が存する。ただし、明全の東大寺戒壇での授戒は、入宋に際して過去に遡って作成された本物そっくりの偽文書である点で、後世に残されることの少ない戒牒の形態を知る上ではその史料価値は高いとされる。

(25) 道元禪師の入宋まもなくに戒臘の新到列位問題が起こっているが、その伝えられる上表文によれば、道元禪師は円頓菩薩戒と比丘具足戒のちがいを問題としてはおらず、あくまで国のちがいによって戒臘を無視して座位が決められていることに異議を申し立てている。したがって、道元禪師も明全と同様に南都東大寺の比丘戒牒を持参したものとみたい。

(26) 実際に江戸期の一丈玄長(一六九三―一七五三)は『禪戒問答』(曹全・禪戒・三〇一b)において、

永平の昔年支那に於て戒臘の論ありしも、(支那は比丘戒にて座位を定る故に)比丘戒の臘なりと知るべし。永平曾て叡岳の菩薩戒を稟持せりといへども、蚤歳より渡宋の志あるが故に、南都の戒壇にして、比丘戒を受得せり。この事、永平の伝中に載せずと雖も、其戒牒、今に本山に残れり。

と記しており、道元禪師が明全と同じように南都の比丘戒牒を受け、それが永平寺に現存していたという事実を伝える。

(27) この明全の道元禪師に対する師資相承のことばは、明らかに『道元和尚広録』卷六「永平禪寺語録」の「明庵千光禪師前権僧正法印大和尚位忌辰上堂」(『道元禪師全集』下巻、一一三頁)に載る、

師翁問_二虚菴和尚_一、学人_三不思善不思惡_二時如何_一。虚菴曰、本命元辰。師翁曰、恁麼則不_レ從_二今日_一去_レ也。虚菴曰、若恁麼則不_レ妨_二今日_一去_レ也。師翁礼_レ拜。虚菴曰、面_レ南_レ看_二北斗_一。という榮西が虚庵懐徳と交わした問答に基づいていることが知られる。ただし、この問答は榮西関係の著述や史料には見い出せず、榮西・明全・道元禪師と室中に伝えられてきた機縁であったのかも知れない。

(28) 訂補本『建徳記』(河村本一一―一二頁)には、
承久三年辛巳九月十二日、建仁明全和尚ヨリ師資ノ許可アリト。永平二代和尚ノ話ヲ聞リト、義介和尚ヲセラレシト云伝フ。貞応元年壬午、師歳二十三歳、コレマデニ大蔵經ヲ周覽スルコト二回ナリ。マタ仏祖ノ正伝ノ大戒ヲ明全ニ伝授セリ。

とあり、その補注には先の明全の師資付法偈について、
永平寺ノ室中ニ一幅ノ古筆アリ云ク、承久三年九月十二日、伝授師資相承曰、不思善不思惡、正当恁麼時、如何本命元辰。云々は則禪宗之眼目、得脱之根源、雖_レ得_二百千兩金_一、輒不_レ可_レ伝_二授_一之而已。已上コノ下ニ華押アリテ名ハ

無シ。明全和尚ノ筆カ未審。コノ文ハ虚庵ト榮西トノ機縁ヲ挙セント察セラル。コノ旨ナレバ、明全ヨリハ許可アリケレドモ、定テ祖師ノ心底ニハ未在下見ヘテ、入宋アラレシナリ。

と注記しており、道元禪師は明全から許可されたものの、いまだ心中に納得するものがなかったために入宋したと推測している。

(29) 長円寺本『正法眼蔵隨聞記』卷六。大久保道舟編集『道元禪師全集』卷下、四八五〜四八七頁。春秋社編『道元禪師全集』第七卷、一三八〜一四〇頁。

(30) 常陸太田市正宗寺文化財保存協会編『正宗寺』(昭和五八年三月刊)参照。

(31) 前掲書『正宗寺』の宇野悦郎氏担当の「勝案・正法・正宗寺の歴史」の箇所(九五頁下段)を参照。

(32) 常陸太田市史編さん委員会編『佐竹系図』(常陸太田市史編さん史料(9)の「秀義」の項(二九頁〜三五頁)を参照。

(33) ただし、この明全に関する勸請書と入宋の際の法語を刻んだ大鐘は、すでに現今の正宗寺には現存していないため、具体的に如何なる内容のものであったかは定かでない。

(34) 道元禪師の渡航費が久我家から出ていた可能性を中世古様道『道元禪師伝研究』の「入宋」の「入宋費用」は指摘する。

(35) 前掲書『正宗寺』(九五頁下段)を参照。

(36) 佐竹貞義の子である月山周枢(一一三〇—一一三九九)は出家して京都に上り、靈龜山天龍寺の夢窓疎石(一一二七—一一三五)に師事してその法を嗣いでいる。常陸に帰省した周枢は暦応四年(一一三四)三月に貞義が正法院内に開創した正宗庵の開山に迎えられるが、このとき周枢は疎石を勸請開山とし、自ら二世に就いている。後にこの正宗庵は伽藍を整え、万秀山正宗寺へと発展していくのであり、後世、勝樂寺や正法院もその中に吸収統合されていくことになる。正宗寺

には佐竹氏の一族出身の禪僧が多く住職となっており、臨済宗の常陸進出の大きな拠点として注目される。詳しくは前掲書『正宗寺』を参照。

(37) 俊仍撰とされる金沢文庫所蔵『教誠儀抄』に、合掌、故仏法房伝ヲトカヒノ下束置之。云々。私注、故仏法房者、師云、法師御弟子也。法師常々合掌可_レ如_レ仏法房_一仰セラレタリ。

という記事あり、道元禪師が俊仍に学び、その合掌のさまを称えられたとされる。おそらく道元禪師は入宋に際して、中国仏教の事情や中国語の習得などを直に俊仍の下で学ぶことがあったものとみられる。あるいは明全も同じく俊仍に学ぶ機会が存した可能性も指摘されよう。詳しくは納富常天「俊仍と道元」(『印度学仏教学研究』第二三卷第一号)を参照。

(38) 訂補本『建徳記』の補注には、此時ノ渡海牒ニ通、永平寺ノ宝庫ニ伝在セシガ、正徳甲午ノ三月九日ニ焼失セリ。

とあり、正徳四年三月九日の永平寺の火災で焼失したとされる。『永平寺史』卷下(九五頁)参照。

(39) 『伝光録』「永平元和尚」の章に「ヤヤ七歳ヲヘテ、二十四歳ノ春、貞応二年二月二十二日、建仁寺ノ祖塔ヲ礼辞シテ、宋朝ニオモムキ、天童ニ掛錫ス。大宋嘉定十六年癸未ノ曆ナリ」とある。

(40) すでに雍正十一年(一七三三)本『寧波府志』卷三三「寺觀」には景福寺の記載は存しない。

(41) 『泉涌寺不可棄法師伝』には、明年春起単、復往_三四明_一、依_三止景福寺如庵律師_一(諱了宏)、以_レ日兼_レ夜、除_レ睡忍_レ勞、僅跨_三三年_一、能誦_三律部_一、持犯開遮、無_レ不_三精通_一。又嘉泰二年十月初五日、離_三四明_一。とあり、俊仍が景福寺にて如庵了宏に学んだことを伝えており、その門人の安覚良祐も景福寺の道常に律を学んでいる。

また『元亨釈書』巻七「釈弁円」の伝にも、

嘉禎元年泛海、十寅夕而著宋明州界、即理宗端平二年也。先寓城之景福律院、聽月宗主之開遮、不幾入天童山。

とあって、東福円爾もやはり景福寺にて月宗主に学んでいる。したがって、明全が至った時の住持である妙雲も了宏の系統に属する律僧であったものとみられる。

(42) 『攻媿集』巻五七「記」の「天童山千仏閣記」には榮西に關する記述として、

十六年、虚庵懷敏、自天台万年来、主是刹、百廢具舉、追跡二老(宏智正覺・慈航了朴)。而千仏之閣、歲久寢圯、且將弗支、猶以前人規模為未足。以称上賜、欲從而振起更出旧閣及前二閣之上。僉以為難、師之志不回也。先是、日本国僧千光法師榮西者、奮發願心、欲往西域、求教外別伝之宗。若有告以天台万年然可依者、航海而来以師為歸。及遷天童、西亦隨至居。歲余、聞師有改作之意、請曰、思報授之恩、麤軀所憚、況下此者乎。吾忝国主近属、它日歸国、当致良材以為助。師曰、唯。未幾遂歸、越二年、果致百困之木凡若干、挾大舶泛鯨波而至焉。云々。

とあり、その中国での評価の一端を伝えている。

(43) 大日房能忍および日本達磨宗については、『宗学研究』第二六号に船岡誠「日本禅宗史における達磨宗の位置」、石川力山「達磨宗の相承物について」、高橋秀栄「三宝寺の達磨宗門徒と六祖普賢舍利」、中尾良信「大日房能忍の禅」がそれぞれ収められており、また中尾良信「達磨宗の展開について」(『禅学研究』第六八号)にも詳しい。

(44) 『介石和尚語録』では明確にならないが、智朋が温州(浙江省)雁蕩山の羅漢禅寺に初開堂するのは紹定二年(一二二九)二月三日であり、時期的には道元禅師らの在末期に合致する

ことになる。

(45) 『大宋名藍図』(『五山十刹図』とも)の「天童山景德寺伽藍配置図」を参照。

(46) 『典座教訓』(大久保道舟編集『道元禅師全集』二九九頁)を参照。

(47) 隆禅と伝蔵主に関する記事は『正法眼蔵』「嗣書」に、また龍門の仏眼禅師清遠和尚の遠孫にて、伝といふものありき。かの師伝蔵主、また嗣書を帶せり。嘉定のはじめに、隆禅上座、日本人なりといへども、かの伝蔵主やまひしけるに、隆禅よく伝蔵主を看病しけるに、勤勞しきりなるによりて、看病の勞を謝せんがために、嗣書をとりいだして礼拝せしめけり。みがたきものなり、与尔礼拝といひけり。それよりこのかた八年のち、嘉定十六年癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓直するに、隆禅上座ねんごろに伝蔵主に請して嗣書を道元にみせし。

(48) とあることにより知られる。ただし、伝蔵主が臨済宗楊岐派の仏眼清遠(一〇六七—一一二〇)より如何なる系譜に属する人であったか、その嗣承は定かでない。なお隆禅に關しては、原田弘道氏に「道元禅師と金剛三昧院隆禅」(『印度学仏教学研究』第二三集第一号)と「日本曹洞宗の歴史的性格」(『道元禅師と隆禅・覚心との交渉をめぐって』(『駒沢大学仏教学部論集』第五号)があり、中尾良信氏に「中納言法印隆禅について」(『宗学研究』第二九号)および先の「退耕行勇とその門流について」にその考察が存する。

隆禅は嘉定年間(一二〇八—一二二四)のはじめには入宋していたことになる。嘉定一六年より八年前は嘉定九年であり、了心の帰国した翌年に当たっている。とすれば、それ以前に入宋していたらしい隆禅は、同じ行勇門下の了心とともに南宋禅林の視察のために入宋していた可能性は強い。そして、了心の帰国した後も天童山に留まり、辨道に努めていたことにならう。隆禅と明全・道元禅師の関わりは同じ榮西門

(49)

流として注目すべき事跡といえよう。
『天童寺志』卷二「建置考」には、

光宗紹熙四癸丑、虚庵禅师懷敏、重建千仏閣。日本千光
師榮西、航三巨木来佐。

という記事を挙げて後、参政攻愧宣献楼鑰の「千仏閣記」を載せている。ただし、この千仏閣は宝祐四年（一二五六）の寺災で焼失し、景定四年（一二六三）に至って、無準下の簡翁居敬によって再建されている。ところで千仏閣に関わる建物とみられる千光法師祠堂については、あるいは明全らに先立って入宋帰国している大歇了心あたりが、その造立に関与している可能性も存する。

(50)

道元禅師の諸山歴遊に関しては、近年における成果として鏡島元隆「道元禅師の在宋中の行実―五山・天台山参拝にちなんで―」（大東出版社『道元禅師とその周辺』所収）、石井修道「道元禅師の大梅山の霊夢の意味するもの―宝慶元年の北帰行―」（『中国仏蹟見聞記』第七集）、伊藤秀憲「道元禅師の在宋中の動静」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四二号）などが存するが、それぞれにかなりの相違が見られる。ただし、この点に関しては筆者も別個の説を考えている。

(51)

雁蕩山・天台山などへの歴遊については、「のちに宝慶のころ、道元、台山・雁山等に雲遊するついでに、平田の万年寺にいたる。（中略）道元、台山より天童にかへる路程に大梅山護聖寺の旦過に宿するに、大梅祖師きたりて、開華せる一枝の梅華をさづくる霊夢を感ず」（『正法眼蔵』「嗣書」とある）。

(52)

『嘉定赤城志』卷二八「寺観門二」「天台」の「禅院」の項によれば、
万年報恩光孝寺、在_三県西北五十里。唐大和七年、僧普岸建。（中略）淳熙十四年、日本国僧榮西、建_三門西廡、仍開_三大池。

とあり、淳熙一四年（一一八七）に榮西が虚庵懷敏の席下で

仏樹房明全伝の考察（佐藤）

(53)

資財を投じて万年寺の三門や西回廊を再建し、大池を開拓したことを伝えている。
宗鑑と元奩に関して「ときの住持は福州の元奩和尚なり。宗鑑長老退院ののち、蕁和尚補す、叢席を一興せり」（『正法眼蔵』「嗣書」とある）。

(54)

『仏祖宗派図』には臨済宗黄龍派の「万年心聞曇贇」の法嗣として「大瀉大菴宗鑑」とあり、『正誤仏祖宗派図』にも同じく「万年心聞曇贇」の法嗣として「大瀉唶菴宗鑑」とある。この曇贇の法嗣である宗鑑をいまいう宗鑑と断定するはできないものの、状況的には十分に可能といえる。そこでいま南宋中期の黄龍派の禅僧で天童山と万年寺に住した人の系譜を示すなら、

無示介諶——万年心聞曇贇——天童雪庵從瑾——万年虚庵懷敏

——天童慈航了朴——万年唶庵宗鑑——万年元奩

ということになり、衰退期の黄龍派の一派が一時期、両寺院をその活動の中心に置いて置いて余勢を保っていたことが知られる。とりわけ了朴と懷敏は曹洞宗の宏智正覚（一〇九一—一五七）とともに天童山の興隆に尽力した人として名高い。

『宝慶四明志』卷一三「四明郵泉志」「寺院」の「禅院」には天童山景德寺、具東六十里。（中略）紹興初、宏智禅師正覚、撤_レ寺而新_レ之、層楼傑閣倍_レ徙于前。淳熙五年、孝宗皇帝、親灑_レ宸翰、書_三太白名山、賜_レ僧了朴。十六年、僧懷敏来_レ主_レ寺、欲_レ建_三千仏閣、摸画甚_レ広。先是、日本国僧榮西、從_レ敏遊輒_レ辞帰、致_三百困之木_二泛_三鯨波_一以至。經_三始于紹熙四年之季秋_二、歴_三三載_一始就、梵宇宏麗、遂甲_三東南_一。とあり、天童山における正覚・了朴・懷敏の活動と日本僧榮西の助化の概略を伝える。

(55)

如浄伝については、鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』（春秋社刊）、拙稿「如浄禅師再考」（『宗学研究』第二七号）を参照。また如浄の生没年については拙稿「如浄禅師示寂の周

(56) 辺」(『印度学仏教学研究』第三四卷第一号)を参照。
 「采西僧正記文」一通は長野県徳運寺の所蔵である。その内容
 は『興禅護国論』の末尾に付される采西の『未来記』に

「未来を追思するに、禅宗は空しく墜ちじ。余が世を去るの
 後五十年、此の宗最も興るべし。即ち采西自ら記す」とある
 のに合致する。

(57) 理観と覚心の戒脈については『道元禅師全集』巻下(二八九
 ～二九一頁)を参照。

(58) 虞樗の『千光法師祠堂記』は明全の記事をも含んでおり、当
 然、明全の碑が刻まれるとすれば千光法師祠堂内と見られ
 る。

(59) 阿育王山広利禅寺への拜登と晦巖大光への参学については、
 予雲遊のそのかみ大宋国にいたる。嘉定十六年癸未秋のこ
 ろ、はじめて阿育王山広利禅寺にいたる。西廊壁間に、西
 天東地三十三祖の變相を画せるをみる。このとき領覽な
 し。のちに宝慶元年乙酉夏安居のなかに、かさねていたる
 に、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するについて、予知客に
 とふ、這箇は何麼變相。知客いはく、龍樹身現円月相。か
 く道取するに顔色に鼻孔なし、声裏に語句なし。予いはく
 真箇一枚画餅相似。ときに知客大笑すといへども、笑裏
 無刀、破画餅不得なり。すなはち知客と予と、舍利殿およ
 び六殊勝地等にいたるあひだ、数番挙揚すれども、疑著す
 るにもおよばず。おのづから下語する僧侶も、おほく都不
 是なり。予いはく、堂頭にとふてみん。ときに堂頭は大光
 和尚なり。知客いはく、佗無鼻孔、对不得、如何得知。ゆ
 るに光老にとはず。恁麼道取すれども、桂兒も会すべから
 ず、聞取する皮袋も道取せるなし。前後の粥飯僧、みるに
 あやしまず、あらためなほさず、また画することうべから
 ざらん。(『正法眼蔵』「仏性」)

とあり、道元禅師が明全の示寂してまもない時期に阿育王山
 に至り、大光に参学するかたわら、舍利殿などに拜登してい

るらしい。また『宝慶記』にも、

拜問、先日謁育王山長老^二大光^一之時、聊難問次、大光曰、
 仏祖道与^二教家談^一水火也、天地懸隔。若同^二教家之所談^一
 者、永非^二祖師之家風^一。今大光道、是耶非耶。堂頭慈誨曰、
 唯非^二大光一人有^二妄談^一、諸方長老皆亦如^二是^一。諸方長老、
 豈明^二教家之是非^一耶、那知^二祖師之堂奥^一耶。只是胡乱作来
 長老而已。

という問答が存しているが、これもこのとき阿育王山にて大
 光に学んだ内容を問題としたものである。なお晦巖大光は
 東福円爾将来『宗派図』や『正誤仏祖宗派図』四によれば、
 虎丘派の笑庵了悟の法嗣とされる。

廓然が明全と同じく南宋の地に客死したらしいことは、菅原
 昭英「道元僧団における遺偈」(『宗学研究』第三一号)にそ
 の考察が存する。

(60) 『常陸国久慈東郡太田城佐竹大系譜』には「嘉禎二年譜二曰、
 元年十二月十八日卒。歳七十二。相州ニテ卒、常州増井正法
 院ニ葬ル。法名正法院大宗別当源君秀山蓮実禅定門」とあ
 り、『寛政重修諸家譜』第一二九「清和源氏義光流(佐竹)」
 には「嘉祿元年十二月十八日、鎌倉名越の館にをいて卒す。
 年七十五(寛永系図七十二)」。秀山蓮実と号す。常陸国佐都西
 太田郷の勝楽寺に葬る」とある。詳しくは常陸太田市史編さ
 ん委員会『佐竹系譜』(常陸太田市史編さん史料(9))の三一
 ～三二頁を参照。

(61) 隆禅が如浄の入寺以降もしばらく天童山に留まっていたこと
 は『宝慶記』に、

問云、菩薩戒何耶。和尚示曰、今隆禅所誦戒序也。
 という如浄の言があることによつて確かめられる。隆禅は了
 派示寂の後には如浄の席下にあり、宝慶元年七月より道元禅師
 が親しく如浄に入室した直後にも、なお天童山にあって道元
 禅師と関わっている。とすれば当然、五月に明全が示寂する
 のを道元禅師らとともに目の当たりにし得たことにならう。

隆禪がその翌年の春に帰国の途に着いておるとすれば、三月に行勇の席下に帰ることは可能であり、明全示寂の一部始終を行勇に語ったのではなからうか。

(63) 道元禪師の帰国年月は瑞長本『建搨記』に「安貞元年丁亥八月、已ニ帰朝シ給。二十八歳辰也」とあることに因む。

聖薫編集『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』(『続群書類従』第九輯上に所収)の嘉祿三年(一一二七)の項によれば、この年一〇月一五日に紀伊(和歌山県)由良庄の西方寺(後の興国寺)草創の供仏施僧の儀式に際して、

且請_二梶尾明恵上人明辨、_一扁_二寺曰_一西方。使_二永平寺仏法上人道元書_二額之篆字_一。本尊阿弥陀像一鋪者、毘沙門堂明禅法印、開眼供養。

という記事が存し、明恵上人高辨が寺に西方の名を付し、道元禪師が実際の寺額を書いたとされる。『舍利相伝記』の撰述とはほぼ同時期における京都周辺での道元禪師の活動が偲ばれ、行勇や隆禪との関わりの中に道元禪師もあつたことが知られよう。

(65) 拙稿「初期曹洞教団の関東進出―明全・詮慧と常陸佐竹氏―」(駒沢大学『禅研究所紀要』創刊号)参照。

(66) 古写本『建搨記』には、

寛元元年七月七日改元ス。宇治ノ寺ニ御住ノ間ヲ算合スレハ、従天福元年、至寛元元年、十一箇年也。此深草寺ハ、王舎城ニ近シテ月卿雲客、花族車馬、往来不絶。随縁説法大家一百余、受菩薩戒弟子二千有余輩也、度生方便、仏祖ノ古風ナレトモ、吾カ所望ハ、安閑無事也トテ、常山林泉石ノ便宜ヲ求メマシマスニ、有縁ノ檀那、安閑ノ在所トテマイラスル山林園地十二箇所也。然トモ、何レノ地モ皆ナ和尚ノ御意ニ合ス。波多野雲州太守藤原之義重、参シテ被申様ハ、越州吉田郡ノ内、深山ニ安閑古寺アリ、某甲知行ノ内也。御下向アリテ度生説法アラハ、一国ノ運、又当家人ノ幸ナルヘシト言上ス。和尚答云、我先師天童如浄古仏、

大唐越州ノ人事ナル間々、越之名ヲ聞モナツカシシ、我所望也。則チ御下向アルヘシト御返事アリ。

とあり、有縁の檀那で安閑の在所をもって道元禪師を招かんとする者が一二箇所に及んだとされる。ただし、『三大尊行状記』(『三祖行業記』も)や『伝光録』の道元禪師の箇所では建仁寺から深草の地に赴く頃のこととされる。

(67) 『道元禪師全集』下巻、一一一―一二頁および一三三頁。明全への像贊は『道元禪師真筆集成』にも載つておらず、すでに現存していない。

(68) 『修訂増補』道元禪師伝の研究』一二〇頁に『道正庵系図』『道正庵元祖伝』によって考察している。

(69) 仮に後に伝える木下道正や加藤景正らが道元禪師とともに入宋したとされるならば、彼らもともと明全ゆかりの人々であつたことにならう。

(70) その後の満願寺の歴住は嗣法関係が未詳であるが、四世以降を『崇栄山誌』「各大檀公開山歴住伝統譜」の「当寺再興臨濟開山同歴」より示すならば、

(71) 四世天巖光国大和尚(暦仁元年入山、建長七年四月二十二日示寂)

五世天祐明順大和尚(建長五年入山、建治二年十一月三日示寂)

六世篤応亮高大和尚(弘長三年入山、正安三年六月朔日示寂)

七世蘭谷堂隆大和尚(建治二年入山、正応五年八月十五日示寂)

八世祖山靈峰大和尚(正応五年入山、正和元年正月二十九日示寂)

九世大泉明洲大和尚(応長元年入山、正中二年十月七日示寂)

十世天外祖龍大和尚(正中二年入山、康永三年十一月二日示寂。元弘三年五月、新田左中将義貞公、兵ヲ勤王ニ举

ケシ時、当寺ニ不動尊ヲ造立シテ、行基作新田家尊崇ノ新田勝軍不動尊ヲ安置シ戦勝ヲ祈リ、賊ヲ鎌倉ニ討ツ。依テ満願護国寺ト改、祈願所トナシ、寺領百貫文ヲ寄附。延元三年八月二十八日、新田左少将義宗公、不動院再興シテ義貞公尊牌ヲ安置ス。

十一世高安大愚大和尚（康永二年入山、応安六年五月十八日示寂。当寺大檀那新田義貞公部将、畑時能、延元四年十月、越前国鷹巣城ニ赴テ賊軍ト戦フ。同二十四日、同所伊地山ニ於テ時能戦死。其臣児玉五郎左エ門ナル者、主ノ首ヲ携来テ、当寺境内ニ壺丈有余ノ塚ヲ築テ葬。同延元五年十月二十四日、畑氏善提ノ為、高安和尚、墓側ニ地藏院ヲ造立シテ地藏尊ヲ安置ス。正平三年、児玉五郎左エ門卒因テ、畑・児玉二氏ノ位牌ヲ安置ス。同正平三年十月二十四日、高安和尚、墳墓ニ害アラシム事ヲ恐レ、畑氏ノ氏神白山権現・稻荷明神ヲ墳上ニ勧請シテ、畑・児玉二氏ヲ祀ル。是ヲ畑児（ハタゴ）塚ト称ス。後世土人誤ツテ愛宕塚ト云。天正十九年、境内上地ノ際、右畑児塚ハ境内ノ外ニナリシヲ以テ、畑氏ノ首塚及ヒ両社トモ現境内ニ移ス。又旧蹟ニハ土人誤通セシヲ以テ、則愛宕神社ヲ祀ル。現今ノ神社是ナリ）

十二世月菴曇慶大和尚（永徳元年入山、応永二十三年九月二十九日示寂）

十三世碩文普巖大和尚（応永二十三年十月入山、長祿二年二月朔日示寂）

となり、人法は定かでないものの、伽藍法としては明全の系統が一三代にわたり連続と維持されたことになろう。とくに一〇世の天外祖龍（？―一三四四）と一一世の高安大愚（？―一三七三）の二人の代には、南北朝の動乱期と相俟って新田・畑・児玉各氏の帰崇とともに満願寺にとって重要な事跡がなされていたことが知られる。

（72） 明智優婆夷に関しては、東隆眞『瑩山禅師の研究』「第一章

（73） 出生」の箇所はその考察が存している。前出。

（74） 拙稿「道元禅師の鎌倉行化とその周辺」（駒沢大学仏教学部論集』第二一号）を参照。

〔付記〕

ところで明全に関しては、いま一つ史実には反するものの、興味深い伝承が伝えられている。すなわち天保一四年（一八四三）編『三国名勝図絵』巻六に、

栄松山興禅寺址（地頭館より南方五町許）。坊津村にあり、田布施常珠寺の末にして、曹洞宗なりしが、今廢す。開山を孤山広照禅師といふ（何時代の人なるや、詳ならず）。当寺の由緒記を按ずるに、皇国に曹洞禅宗を伝へし始祖、道元禅師、求法の為に入唐の時、坊津に來り、当寺に館して、爰より開帆す。時に道元禅師、京都建仁寺の明全和尚と共に同行入唐の志にて当寺に滞留し、便船を待つ。明全和尚たまたま病に罹り、当寺に於て遷化す。於是道元禅師独り当寺より發し、商船に乗りて宋地に至る。因て明全和尚は当寺に葬り、今に其石塔なりとて、当寺境内の樹下にあり、香花を供す。其位牌も当寺に安置す。云々。

という記事が載せられている。もと臨済宗法燈派の孤山至遠（広照禅師、一二七八―一三六六）が禅刹開山としたらしい筑前（福岡県）坊津村の曹洞宗の古刹、栄松山興禅寺（すでに廃寺）は、古くその由緒記によれば、明全や道元禅師が入宋の際に立ち寄った地とされ、しかも明全がこの寺で病に罹って遷化したため、道元禅師のみが入宋の途に着いたことになっている。そして、興禅寺には久しく明全の石塔や位牌が存したとされている。この点は史実とは合わないが、『三国名勝図絵』でも、明全が滞留した縁で、後に墓塔などが建てられたのではないかと推測している。なお、この点は小倉玄照『道元禅師旧蹟紀行』（七七―七九頁）を参照されたい。

さらに古い伝承として、道元禪師に仮託される全くの偽撰ではあるが、石屋派の定庵殊禪（一三七三—一四三二）が永享二年（一四三〇）正月七日に法姪の仲翁守邦（一三七九—一四四五）に付嘱し、その守邦が永享一二年（一四四〇）二月五日に法嗣の雪岑守孫に付嘱した『正法眼蔵抽書梅花嗣書』には、

十八時、八宗ヲ窮、俱舎論ノ中ニ、法身法性迷ヘリト言コトヲ見出テ、經論ノ中ヲサクルニ、遂ニ不レ得。是便教外別伝ナルヘシト明ヲ知テ、日本大未己酉沽浣上旬ニ、建仁開山ニ參テ、故和尚ニ奉ニ此事尋。同六月一日記以參。故和尚云、汝吾宗有レ縁、曹洞宗可レ有レ縁。大唐ニ天童山ニ如淨和尚禪師ト云人有。此曹洞ノ本源、天下学者ノ蔭涼也。須去今時。吾曰、便万里波濤ヲ隔、某甲不レ及レ力、慈悲以同行、指南玉ヘ。其時、敵和尚嫡弟ニ全和尚ヲ同行トシテ入唐セントス。九州シヤヲシウノ津ニテ、俄ニ疾患有テ寂帰セントス。全和尚、某甲ヲ呼曰、爾、先師ノ処ニテ法輪法性迷ト云ヲ參云、吾ニ不ニ覆蔵、可レ量レ我。已寂ニ及テ爾ニ血脈ヲ授シ、直饒曹洞ノ有縁、吾宗派、願不レ可レ断。其時ニ吾、涕淚悲泣シテ全和尚ヲ指南玉ヘ。其時、敵和尚ニ兼テ呈謁。長老開山塔御座有シ時、某甲問訊又手曰、法身法性、為ニ什麼ニ迷有ル。長老曰、三世諸仏不レ知有、狸奴白狐齊。於レ此、忽然大悟ス。全和尚聽レ之、釈迦老師モ如是、汝保護セヨト言了。血脈ヲ某甲授テ曰、尽未來際、断絶セシムルコトナカレト云了テ、九月十五日ニ示寂ス。已經ニ七日、便船ヲ起テ、大唐正通八年癸巳五月十日、天童和尚ニ參。（永久岳水『正法眼蔵の異本と伝播史の研究』四三六—四三七頁）

という記事が存し、やはり記事や年記にかなりの混乱と錯綜がみられるものの、同じく明全が南宋の地ではなく、九州にて俄かの疾患で示寂したことになっている。

さらにまた聖福寺文庫刊行会『聖福寺史』第四「聯芳編」の「第五世退耕行勇禪師」の項（三七頁）の末尾には、

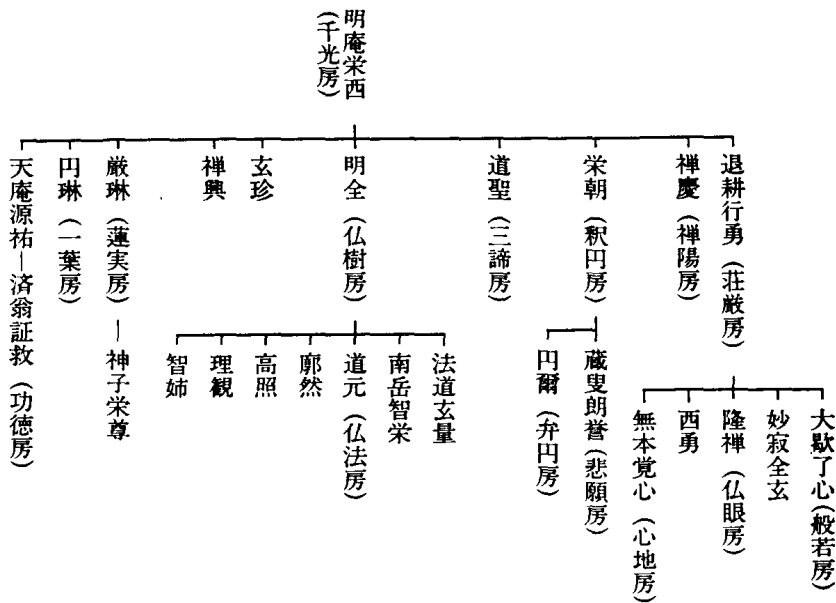
仏樹房明全伝の考察（佐藤）

或は曰く、師諱は玄信、周防の人、同源と同しく宋に入り、帰途、颶風舟を覆へし海に没して寂すと。未だ其據を詳にせず、姑く記して参考に資す。

と記されており、行勇と明全を混乱したらしい記録ではあるが、道元禪師（同源とする）と帰国の途中に行勇（玄信とする）が舟の転覆により海に没して示寂したことになっている。

これらの諸説はいずれも実際には天童山にて客死した明全の事跡が、かなり変質して伝承されていったがために生じた誤記であろう。

宋西門流略系譜



※榮西下三世までを記す。ただし、必ずしも嗣法関係ではない。